

構造特記仕様書 2009年度版

- § 1 一般事項
- 選択項目は ◎ 印を適用し、② 印が無い場合は * 印を適用する。
○ 印が複数有る場合は、共に適用する。
- 1-1 使用材料は原則としてJIS規格品、又は大臣認定品とする。
1-2 設計図書は優先順位は下記による。
1) 本特記仕様書
2) 設計図
3) 標準図 (鉄筋コンクリート構造配筋標準図 鉄骨工作標準図)
(鉄筋鉄骨コンクリート構造標準図 高強度せん断補強筋施工仕様書)
(鉄筋コンクリート壁式標準配筋図)
4) 仕様書 (* 公共建築協会 * 日本建築家協会)
5) 日本建築学会標準仕様書、JASS5、JASS6
1-3 各工事に際して、施工計画書及び施工図を提出し、工事監理者の承認を得る。
1-4 構造関係材料及び各種試験成績書・検査報告書を作成し提出する。
第三者機関による検査・試験費用は工事費に (*含む *含まない)
1-5 設計図書に示されていない材料、工法等を採用する場合は文書にて工事監理者の承認を得る。
1-6 梁貫通位置、径、及び貫通数は (意匠部 構造部 *設備部) による。
1-7 その他

§ 2 構造計算ルート

2-1

方向	構造計算ルート
X	◎ル-1 • ル-2 • ル-3 •
Y	◎ル-1 • ル-2 • ル-3 •

2-2 鉄筋の継手及び定着
構造計算ルート別による主筋等の継手重ね長さ等と柱に取り付く梁の定着長さ
* 建築基準法施行令第73条 (政令第73条) による仕様規定
• 日本建築学会 JASS5 (2003)、鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説
• 日本建築学会 RC規準1999
XY両方向ル-1及び梁耐力計算の場合は、政令第73条の仕様規定によらずJASS5 (2003)、鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説及びRC規準1999とすることができる。

- § 3 仮設工事、土工
- 3-1 山留め、掘切り
3-2 埋戻し土、盛土、残土処分
埋戻し土 * 掘切り土の中の良土 • 搬入良土
盛土 * 掘切り土の中の良土 • 搬入良土
残土処分 • 場内地均し • 場外搬出処分 (* 自由 指定場所)

§ 4 地業工事

4-1 基礎及びスラブ地業 (単位:mm)

場所	捨てコンクリート厚さ	A : 砕石	厚さ
基礎	独立、布	◎ 50 • 60 • 100	* A • B • 60 • 100 • 150 •
		◎ 50 • 60 • 100	* ④ • B • 60 • 100 • 150 ◎ 250
地中梁	◎ 50	* ④ • B	* 60 • 100 ◎ 150 •
構造スラブ	◎ 50	* ④ • B	* 60 • 100 ◎ 150 •
土間スラブ	屋内	◎ 50 • 60 • 100	* ④ • B • 60 • 100 • 150 ◎ 120
	屋外	◎ 50 • 60 • 100	* ④ • B • 60 • 100 • 150 ◎ 120

- 注 (1) アンカーボルト支持用フレームの、あと施工アンカーを打ち込む部分は100以上とする。
(2) 埋戻し厚さは100以上とする。
$$\frac{a}{u} \frac{100kN/m^2}{100kN/m^2}$$
- 4-2 設計地耐力 長期 50kN/m² 短期 100kN/m² 終局 kN/m²
地耐力載荷試験 • 行う (箇所、長期設計耐力の3倍を確認する) * 行わない
4-3 地盤改良
• 無筋コンクリート地業 • 締め固め工法 • ソイルセメント杭
• セメント系固化工材埋設 • 圧密排水工法 • 無し
[• 載荷試験 • 一軸圧縮試験] • 行う (箇所) * 行わない
[• 六価クロム溶出試験] • 行う * 行わない
4-4 既製コンクリート杭
1) 杭種
• PHC 杭 • A 種 • B 種 • C 種 •
• ST 杭 • A 種 • B 種 • C 種 •
• SC 杭 t mm • • •
• PRO 杭 • I 種 • II 種 • III 種 • IV 種
• 樹根 • A 種 • B 種 • C 種 •
2) 工法
• 打撃工法 • 油圧ハンマー • ディーゼルハンマー
• 埋込み工法 • プレポーリングセメントミルク注入工法
• プレポーリング拡大掘削工法 (認定工法)
杭周囲定着 * あり • なし
• 中掘拡大掘削工法 (認定工法)
• 回転掘削工法 (認定工法)

3) 杭径、設計耐力、本数表

杭径 (拡底部) mm	長期 kN	短期 kN	終局 kN	本数	備考
()					
()					
()					
()					

- 4) 杭の構成は設計図による。
5) 杭根補強
• かが筋 • スタッ卜溶接 • 杭外周溶接
4-5 場所打鉄筋コンクリート杭、場所打鋼管コンクリート杭
1) 工法
• アースドリル工法 • 拡底アースドリル工法
• リバース工法 • オールケーシング工法 (ベルト工法)
• 既工法 •

2) 杭径、設計耐力、本数表 (拡底部は施工工程を示す)

杭径 (拡底部) mm	管厚 mm	長期 kN	短期 kN	終局 kN	本数	備考
()						
()						
()						
()						

- 3) 杭先端深さ GL- m
4) 孔壁測定 (2 方向)
* 行う (* 全数 * %) • 行わない
5) 使用材料 コンクリートの仕様は設計図による。特記のない場合はJASS5水中コンクリートによる。

コンクリート Fc (* 普通ポルトランドセメント * 高炉セメント B 種)
鉄筋 • D 以下 SD295A • D 以上 SD345
• D 以上 SD390
鋼管 (リップ) • SKK400 • SKK490

- 4-6 鋼管杭、その他特殊杭
1) 杭種
材質
2) 工法
• 打撃工法 (* 油圧ハンマー • ディーゼルハンマー) • 埋込み工法
3) 杭径、設計耐力、本数表

杭径 (拡底部) mm 鋼管 mm 長期 kN 短期 kN 終局 kN 本数 備考

()						
()						
()						
()						

- 4-7 根打地業共通事項
1) [• 杭長決定用先行杭 • 試験杭] • 行う (本) • 行わない
2) 載荷試験 • 行う (箇所、長期設計耐力の3倍を確認する) * 行わない
3) S.L.塗布 • 行う * 行わない

§ 5 鉄筋工事

5-1 材種

種類	径	継手
◎ SD295A	D 16 以下	◎ 重ね継手 • スパイラル • 工場溶接
• SD345	D 19 以上	• 重ね継手 ◎ 接継手 • 機械継手 (継)
• SD390	D 29 以上	◎ 接継手 • 機械継手 (継)
• SD490	D 以上	* 溶接継手 • 機械継手 (継)
• 溶接金網		• 重ね継手
• 高強度せん断補強筋	• 1275級 P	• 重ね継手 • スパイラル • 工場溶接
	• 785級 K	
	• 685級 UD UR	

- 5-2 溶接継手 * ガス圧接 • 突き合せ溶接 (D16以下は重ねアーク溶接でも可)
溶接部の検査 (第三者機関による)
• 抜き検査
• 引張り試験 (JISZ3120)
1 検査ロットにつき ◎ 3 本 •
• 超音波探傷試験 (JISZ3062) • 熱間引抜き試験
1 検査ロットにつき • 30 箇所 •
○ 不合格となった溶接部は切り取って再溶接を行う。また残り全数に対して超音波探傷試験を行う。
1 検査ロットは1組の作業班が1日に施工した溶接箇所の数量で200箇所以内
5-3 梁貫通補強
補強筋は原則として工場製品 (評定品) を使用する。
5-4 その他
鉄筋の組立は適切な位置にスペーサーを使用し、組立後は形状保持のための養生を行う。
コンクリートを2回打する部材は、初回の打設後に鉄筋の清掃を行う。
コンクリート打設前に工事監理者の検査を受け不備箇所は修正を行う。

§ 6 コンクリート工事

- 6-1 設計基準強度 (Fc=210N/mm²)
1) セメント ◎ 普通ポルトランドセメント JISR5210 • 高炉セメント B 種
• 低熱ポルトランドセメント JISR5210 •
2) 粗骨材 砂利 ◎ • 砕石 高炉ハダ骨材 人工軽量骨材 再生骨材
最大径 (mm) ◎ 20 • 25 • 40
3) 躯体 (使用区分は設計図の軸組図に示す)
• 普通コンクリート
• Fc18 ◎ Fc21 • Fc24 • Fc27 • Fc30 • Fc • Fc • Fc
• 軽量コンクリート (* 1 種 • 2 種 気乾単位容積質量 * 18.5 •)
• LFc18 • LFc21 • LFc24 • LFc27 • LFc30 • LFc • LFc
4) 土間コンクリート ◎ Fc21 (ただし柱、壁等と同時に打込む場合は躯体の強度とする)
5) 捨てコンクリート ◎ Fc18
6) 防カ押さえコンクリート • Fc • LFc (気乾単位容積質量 * 18.5 •)
7) かき上げコンクリート • Fc • LFc (気乾単位容積質量 * 18.5 •)

6-2 混和材 * AE 減水剤 • 高性能 AE 減水剤 • 躯体防水材 • 膨脹材

箇所	基礎、地中梁	一般	備考
スラブ	c m	1.5	1.8
水セメント比	%		6.0 以下
単位水量	kg/m ³		18.5 以下
単位セメント量	kg/m ³		27.0 以上

- 6-4 試験 (躯体コンクリートの28日圧縮試験は公約機関において行う)
1) 骨材 [◎ 塩分含有量 ◎ アルカリシリカ反応性] ◎ 行う • 行わない
2) フレッシュコンクリート [◎ スランプ ◎ 空気量] ◎ 行う • 行わない
3) 躯体のせき取り外し時期決定圧縮試験 ◎ 行う • 行わない
4) コンクリートコア抜き取り圧縮試験 • 行う * 行わない
5) マスコンクリートのひび割れ調査 (温度差解析) • 行う * 行わない
6-5 鋼管強度は下記の両式を満足するものとする。 (補正係数は工事費に含む) ΔF=30 ◎ 行う
 $F28 \geq F_{ot} + \Delta F + 1.73\sigma$ $F28 \geq 0.85 F_{ot} + \Delta F + 0.7\sigma$

6-6 せき板及び支柱の在置期間 (普通ポルトランドセメントの場合)

	基礎、梁側、柱、壁	スラブ下	梁下
コンクリートの材齢による場合	15 °C 以上 3 日	17 日	28 日
場合	5 °C 以上 5 日	25 日	
圧縮試験による場合	0 °C 以上 8 日	28 日	

圧縮試験による場合 5N/mm² 0.85Fc 但しは 12N/mm² 設計強度

- 6-7 高強度コンクリート及びプレレストコンクリート工事は別記特記仕様書による。

§ 7 鉄骨工事

7-1 材種及び使用箇所

規格名称	鋼材名	柱	通し	内	大	フ	小
一般構造用圧延鋼材	• SS400 •						
溶接構造用圧延鋼材	• SM400A • SM490A						
建築構造用圧延鋼材	• SM400B • SM490B • SM400C • SM490C						
一般構造用角形鋼管	• STKR400 • STKR490						
冷間成形角形鋼管	• BQK295 • BQP235 • BQP235						
熱間成形角形鋼管	• SHC400B • SHC400C • SHC490B • SHC490C						
一般構造用炭素鋼管	• STK400 • STK490						
一般構造用軽量鋼管	• SSC400 •						

7-2 高力ボルト

高力ボルトの種類	使用箇所
トルシア形高力ボルト	• S10T 全般
JIS形高力ボルト	• F10T トルシア形が使用できない部分
溶融亜鉛メッキ高力ボルト	• FBT 母材が亜鉛メッキされている部分

- 7-3 普通ボルト、アンカーボルト
1) 材質 * S S 4 0 0 • S S 4 9 0 (M 以上) • S N R 4 0 0 • S N R 4 9 0 (M 以上)
2) 大臣認定社印 (メーカー仕様による) • 使用する • 使用しない
7-4 鎖付きスタッド

径	長さ (mm)	使用箇所
16 φ	• 80 • 100 • 120 • 150 •	
19 φ	• 80 • 100 • 120 • 150 •	
22 φ	• 100 • 120 • 150 •	

- 7-5 溶接材料
1) アーク溶接に使用する溶接棒、ワイヤ及びフラックスは母材の種類、寸法、及び溶接条件に相応したものを選定する。
2) ガスシールドアーク溶接に使用するシールドガスは溶接に相応したものとする。

7-6 スカラップ形状 * スカラップ工法 ノンスカラップ工法
7-7 継手

	柱	梁
フランジ	• 高力ボルト • 現場溶接	* 高力ボルト • 現場溶接
ウェブ	• 高力ボルト • 現場溶接	* 高力ボルト • 現場溶接

- 7-8 溶接手法及び管理
使用する溶接ワイヤ、入熱量及びバス温度等の仕様については鉄建協又は全構協の仕様で、専任の溶接施工管理技術者により管理を行うこと。
7-9 チョッキプレート (単位 mm)
1) 床用 高さ • 板厚 •
2) 合成スラブ用 高さ • 板厚 •
3) 型枠用 高さ • 板厚 • 形板 タイプ
4) 防錆処理 • プライマー • 亜鉛メッキ • Z12 • Z27
7-10 錆止め塗装 (工場塗 * 2回 1回、現場タッパ処理とする)
1) 素地こしらえ * ケレン • 塗装
2) 錆止め塗料

適用	塗料	種別	標準膜厚
室外	• *	• *	
室内	• *	• *	
• *	鉛、クロムフリー錆止め	JISK5674	
• *	一般用錆止めペイント	JISK5621	• 1種 • 2種
• *	鉛丹錆止めペイント	JISK5622	• 1種 • 2種
• *	シアナイド錆止めペイント	JISK5625	• 1種 • 2種

35μm

- 3) 溶融亜鉛メッキ • 行う • 行わない
7-11 溶接部の検査 (受入検査) * 行う • 行わない
1) 受入検査を行う第三者検査機関は、建築主、設計者、工事監理者又は工事施工者 (元請) との直接契約による。
2) 第三者検査機関は (社) 日本溶接協会による O I W 検査事業者認定種別における超音波探傷検査部門の認定を取得した事業者とし、当該工事の鉄骨製作工場の社内検査を行っていない事業者とする。
3) 受入検査は目標による外観検査と超音波探傷検査とし、社内検査完了後に行う。
4) 外観検査の合格判定は国土交通省告示1464号による。ただし告示に定めのないものは日本建築学会「JASS6 鉄骨工事 2007 付則6 鉄骨構造検査基準」の限界許容率による。
5) 超音波探傷検査は日本建築学会「鋼構造建築溶接部の超音波探傷検査規程・同解説」2008により、合格判定は7.2 検査を考慮し無い溶接部のうち、引張力が作用する溶接部の項を適用する。
6) 溶接箇所数の数え方及び JASS6 鉄骨工事 2007 表5.1 溶接箇所数の数え方による。
7) 受入検査の抜き取り方法及び抜き取り率は以下による。
a) 工場溶接の場合
i. 検査ロットは各部、各工区毎に溶接箇所300箇所以内で構成する。
ii. 抜き取り数は各ロット毎に30箇所をランダムにサンプリングする。
iii. サンプリングの結果、不合格率が5%以内の場合はロットを合格とし、不合格率が5%を超えた場合は更に同一ロットの中から30箇所をサンプリングし、合計60箇所の不合格率が5%以内の場合を合格とする。不合格率が5%を超えた場合は残り全数の検査を行う。
b) 現場溶接の場合
i. 全数検査とする。
8) 検査により不合格と判定された溶接部はすべて補修を行い、再検査して合格とならねばならない。
9) ずれ、食い違いの補修方法は、独立行政法人 建築研究所監修「突き合せ継手の食い違い仕口の検査・補修マニュアル」等を参照にする。

7-12 鉄骨製作工場

国土交通省大臣認定 (グレード)				
S	H	M	R	J

§ 8 コンクリートブロック・ALCパネル・押出成形セメント板・PCa板工事

- 8-1 コンクリートブロック
1) 種類 ◎ A 種 • B 種 • C 種
2) 厚さ mm ◎ 100 • 120 • 150 • 190
8-2 ALC パネル
1) 使用箇所 • 床 • 屋根 • 外壁 • 内壁
2) 厚さ mm • 75 (8.0) • 100 • 120 • 150 • 175
3) 外壁取り付け構造

方向	構法	使用箇所	備考
縦	• スライド構法		
	• ロッキング構法		
横	• カバープレート構法		
	• ボルト止め構法		

8-3 押出成形セメント板
外壁取付構法及び厚さ

方向	構法	使用箇所	備考
縦	• ロッキング構法		
横	• スライド構法		

- 8-4 PCa板
1) 床及び屋根 • 床 • 屋根
• PCa板単独 厚さ mm •
• 合成板
- | PCa板厚さ mm | 現場打厚さ mm | 合計厚さ mm | 備考 |
|-----------|----------|---------|----|
| | | | |
| | | | |
- 2) 外壁 厚さ mm •

鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1) 2009年度版

§1 一般事項

1-1 基本事項

1. 使用材料、工法等は構造特記仕様書による。
2. 設計図書に記載なき場合は本標準図に従うものとする。
また本標準図に明記なき場合は構造特記仕様書1-2-4に指定した共通仕様書及び日本建築学会「JASS5(2003)」及び「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説」による。
3. 本標準図は異形鉄筋を対象とし、dは呼び名に用いた数値とする。
4. 本標準図に示す単位は特記なき限りすべてmmとする。

1-2 その他

§2 共通事項

鉄筋の表示記号及び最外径は下表による。

記号	●	×	◇	○	◎	⊗	⊙	⊚	⊛	⊜	⊝
呼び径 d	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32	D35	D38	D41
最外径 D	11	14	18	21	25	28	33	35	40	43	46

○ フックのない場合
○ フックのある場合
○ 本款に差がある場合
○ 機械式継手表示
○ 溶接継手表示
(ガス圧接、突き合せ溶接)

2-2 鉄筋の折り曲げ

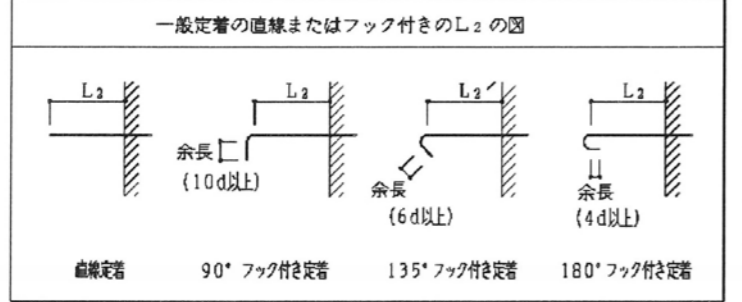
鉄筋の折り曲げ内法直径Dの標準値の採用は JASS5(2003) 表11.2(注)に準拠

折り曲げ角度	図	鉄筋の使用箇所による呼称	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折り曲げ内径(D)
180°		柱・梁主筋 基礎主筋 スライラ筋 壁筋	SD295	D16以下	最小3d以上 (標準5d以上)
135°		スライラ筋 壁筋	SD345	D19~D38	最小4d以上 (標準6d以上)
90°		スライラ筋 壁筋	SD390	D41以下	最小5d以上 (標準7d以上)
			SD490		最小5d以上 (標準7d以上)

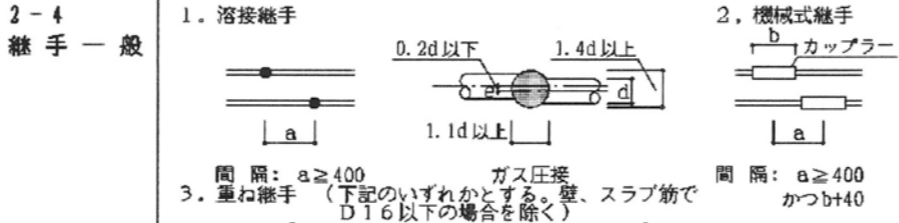
2-3 鉄筋の定着及び重ね継手の長さ

「JASS5(2003)」に準拠

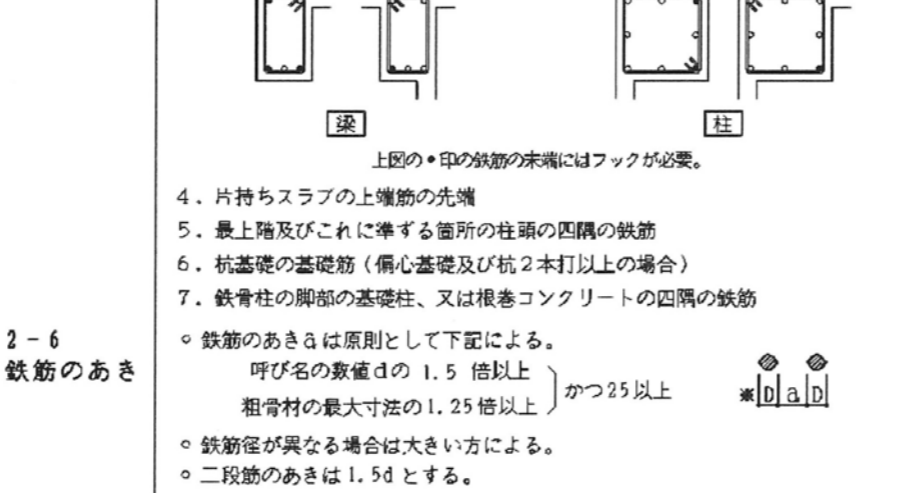
鉄筋の種類	コンクリートの設計圧強率(N/mm ²)	重ね継手の長さ(L ₂)	定着の長さ	
			一般(L ₁)	下地筋(L ₂)
SD295	18	45d 直線または35d フック付	40d 直線または30d フック付	床 10d かつ 150以上
		21~27	30d フック付	床 10d かつ 150以上
SD345	30~45	45d 直線または35d フック付	40d 直線または30d フック付	床 10d かつ 150以上
		21~27	25d フック付	床 10d かつ 150以上
SD390	48~60	45d 直線または35d フック付	40d 直線または30d フック付	床 10d かつ 150以上
		21~27	25d フック付	床 10d かつ 150以上
SD490	30~45	45d 直線または35d フック付	40d 直線または30d フック付	床 10d かつ 150以上
		21~27	25d フック付	床 10d かつ 150以上



1. 重ね継手の長さは鉄筋の折り曲げ起点間の距離、又、フック付きのL₂は仕口面から鉄筋の折り曲げ起点までとし、末端のフックは定着長さに含まない。
2. 軽量コンクリートを使用する場合は、上表の数値に5dを加算する。
3. 構造特記仕様書2-2で政令第3条とした場合、主筋等の継手重ね長さと柱に取り付く梁の定着長さは上表L₁ L₂ かつ40d(軽量コンクリートを使用する場合は50d)とする。
4. 構造特記仕様書2-2でJASS5(2003)、RC規程1999とした場合、主筋等の継手重ね長さと柱に取り付く梁の定着長さは設計者の指示による。参考値として上表JASS5(2003)にL₁ L₂を示す。



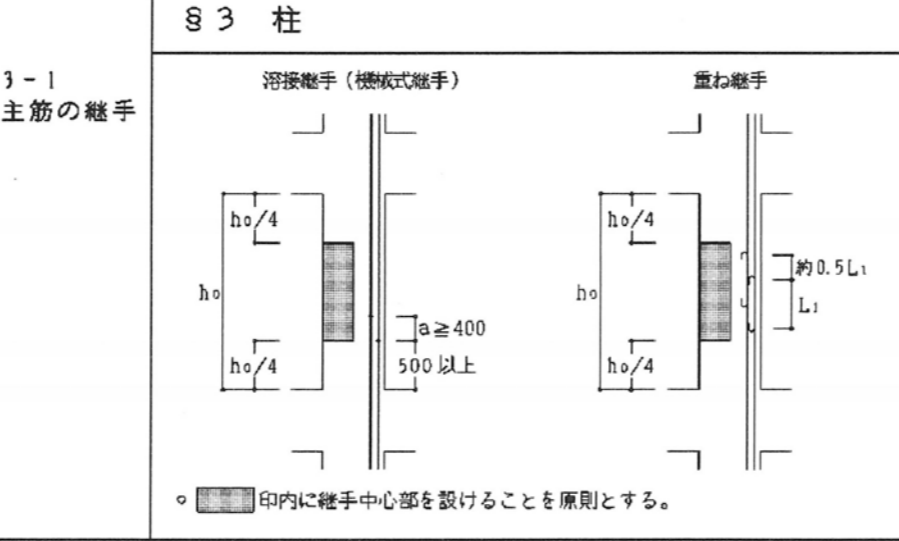
5. 柱梁接合部内に折曲げ定着する主筋を柱側の3/4倍以上のみ込ませてフック付き定着長さ(L₂)が確保できない場合は、柱側の3/4倍のみ込みを併せながら、2-3表のL₂(フック付)の2/3倍を下回らない範囲内で定着長さを短くし(Δ1, Δ2)、短くした長さ(Δ1, Δ2)を余長に加えてよい。但し、構造特記仕様書2-2定着長さRC規程1999を採用した場合はΔ1, Δ2=0とできる。
1. 溶接継手
2. 機械式継手
3. 重ね継手



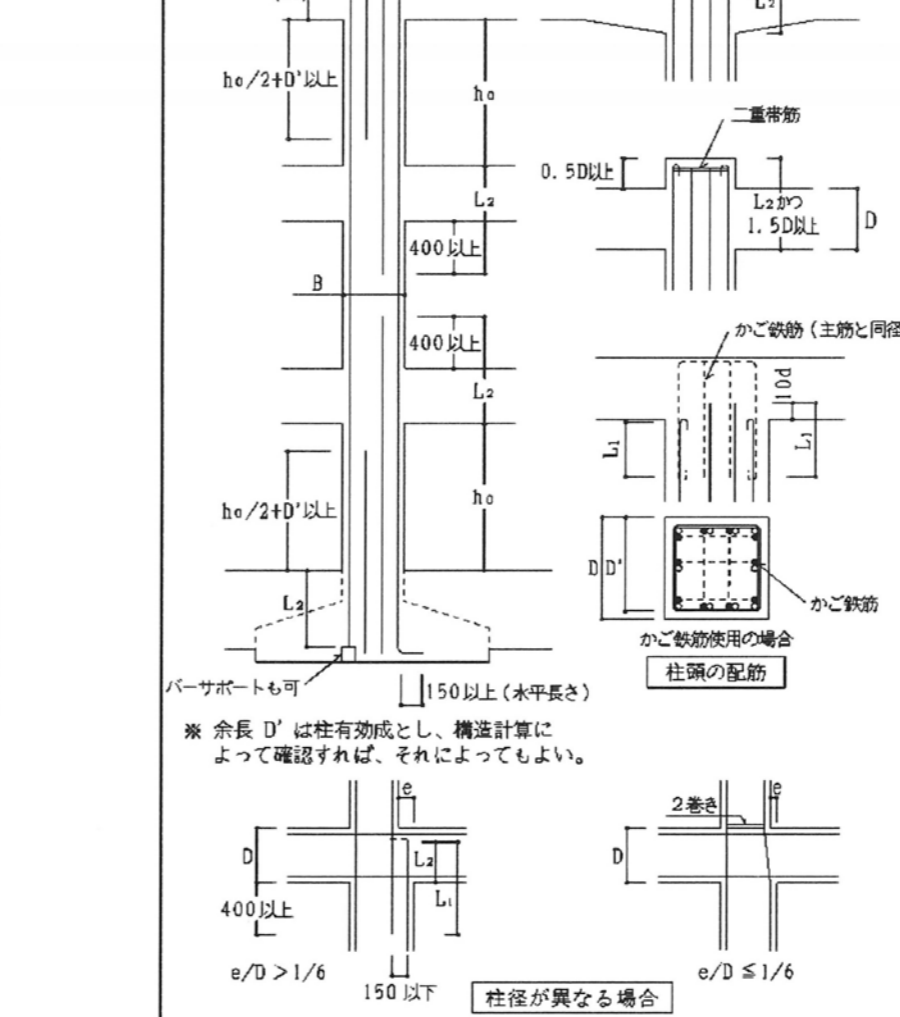
鉄筋に対するコンクリートの設計かぶり厚さと最小かぶり厚さ

部位	かぶり厚さ	
	仕上げあり	仕上げなし
土に接しない部分	屋根スラブ	30(20)
	床スラブ	30(20)
	非耐力壁	40(30)
	耐力壁	50(40)
土に接する部分	柱・梁・床スラブ・壁	50(40)
	基礎・擁壁	70(60)

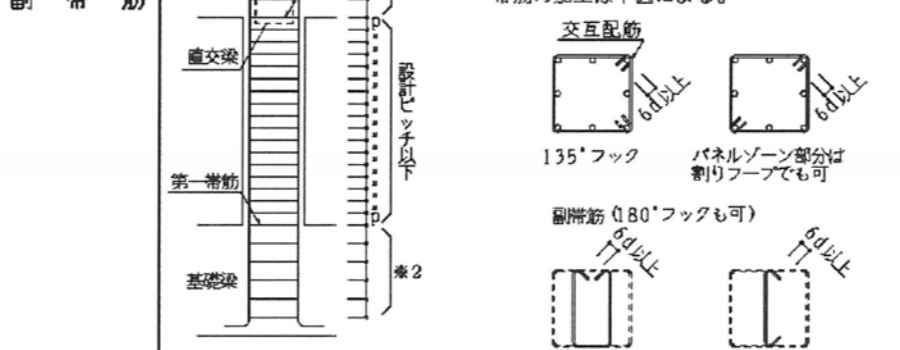
1. ()内の数値は最小かぶり厚さを示す。
2. 仕上げありとは、鉄筋の耐久性上有効な仕上げのある場合とする。
3. ※1 品質・施工法に依り、工事監理者の承認で10減の値とすることができる。
4. ※2 軽量コンクリートの場合は、これに10加算する。
5. 柱・梁の主筋のかぶり厚さは主筋径の1.5倍以上とする。



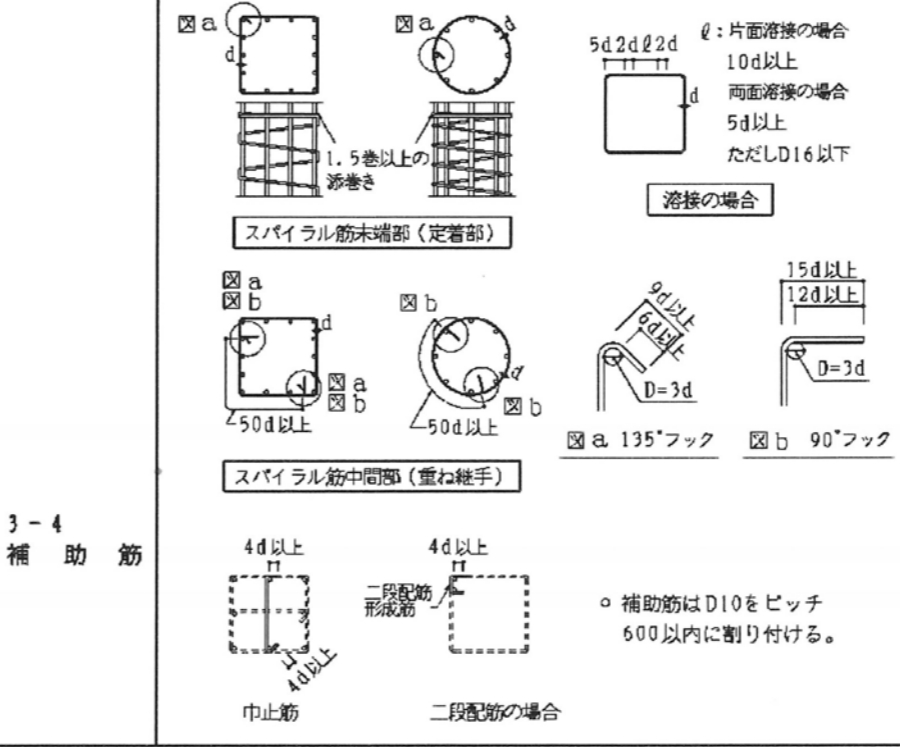
3-2 主筋の定着



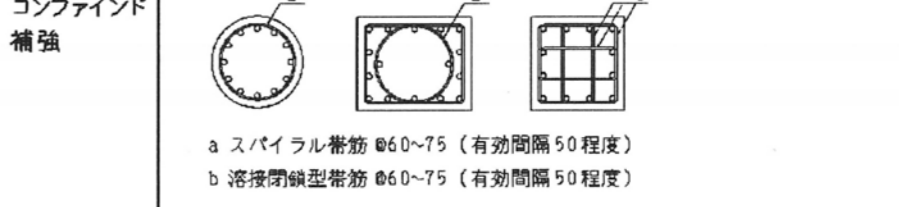
3-3 帯副帯筋



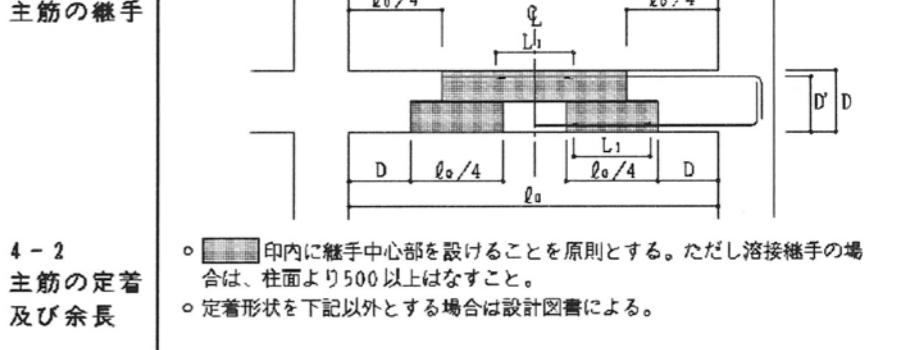
1. 第一帯筋(D13以上使用の事)は梁面に入れ、その間を設計ピッチ以下に割り付ける。
2. 基礎埋部分は、同径で□形φ100以下とする。
3. スパイラル筋の末端処理及び継手は下記のとおりとする。



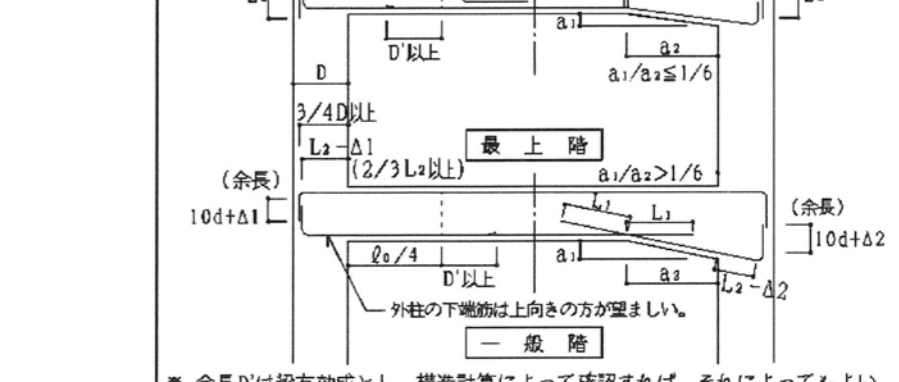
3-5 柱のコンファインド補強



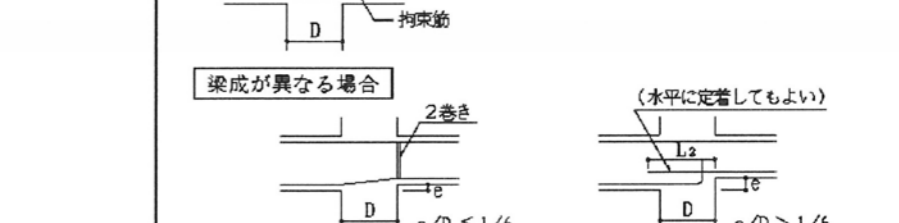
§4 梁



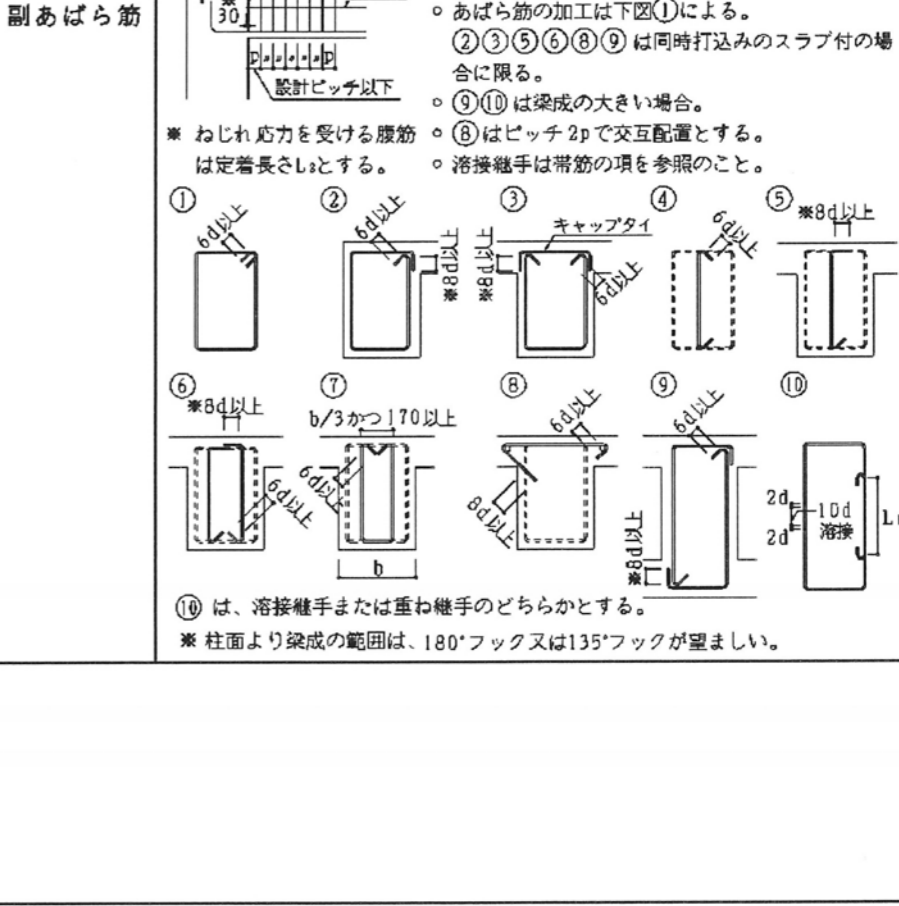
外柱



中柱

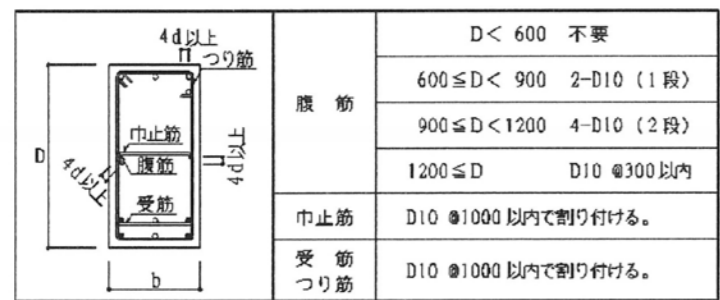


4-3 あばら筋副あばら筋

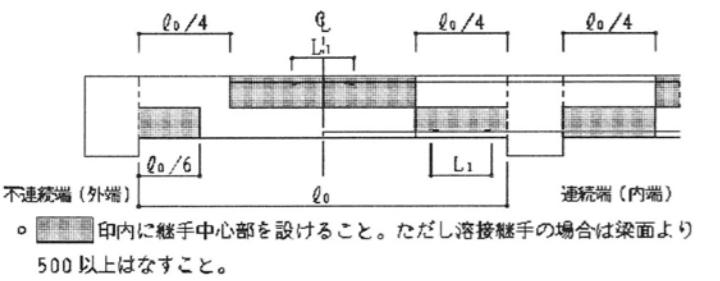


鉄筋コンクリート構造配筋標準図(2) 2009年度版

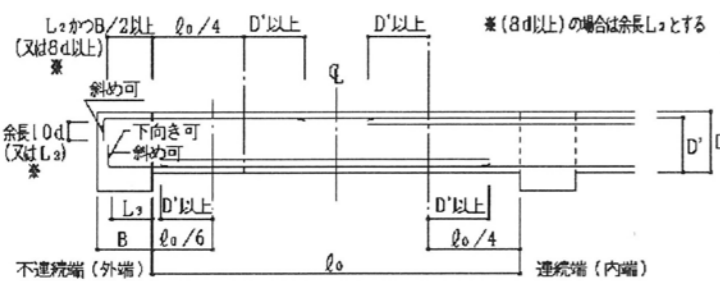
4-4 補助筋



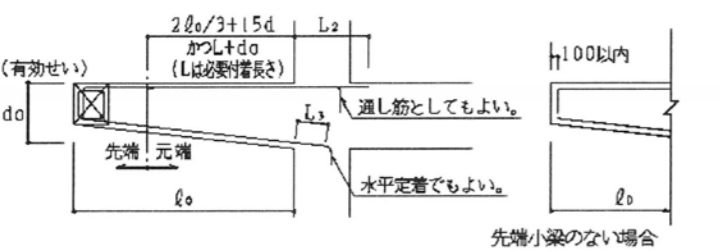
4-5 小梁及び片持梁



定着

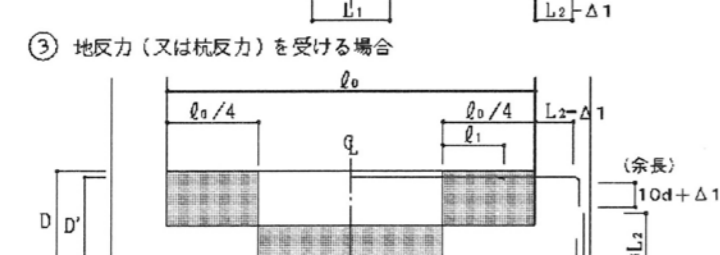
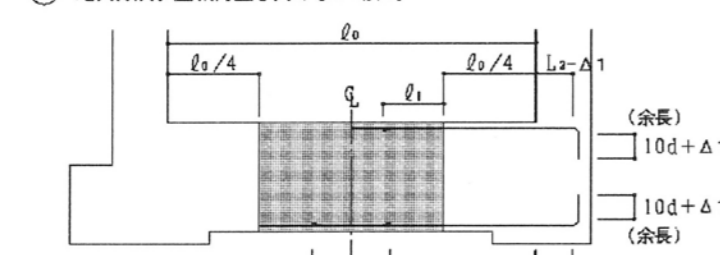


b) 片持梁継手

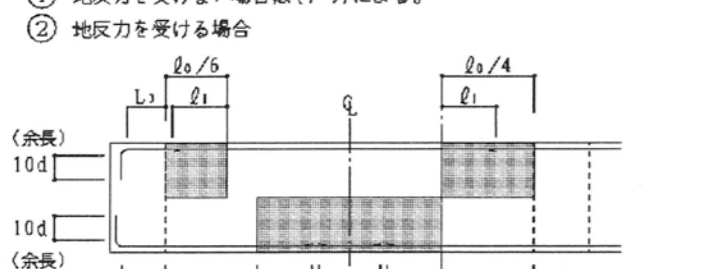


4-6 基礎梁及び基礎小梁

※ 地反力を受ける梁は設計図に示す。
① 地反力を受けなく、床など上載荷重を受ける場合は(4-1)(4-2)による。ただし、余長は $l_1 (l_1 \ge \min(D', L_2))$ とする。
※ 余長 D' は構造計算によって確認すれば、それによってもよい。
② 地反力及び上載荷重を受けない場合。

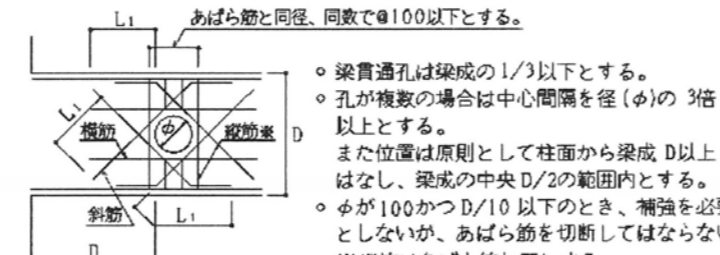


b) 基礎小梁の継手及び定着

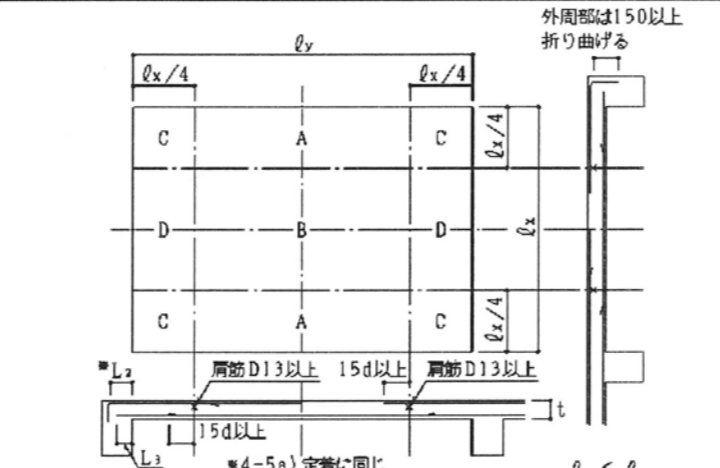


4-7 梁の貫通補強

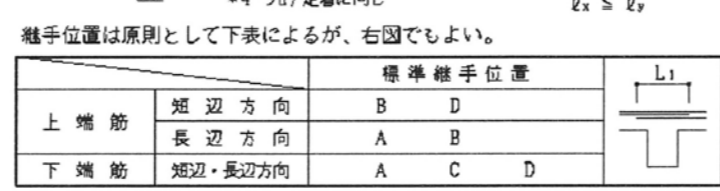
1. 補強筋は原則として工場製品(認定品)を使用する。
2. 認定品を使用しない場合は下図によるが、補強筋は設計者の指示による。



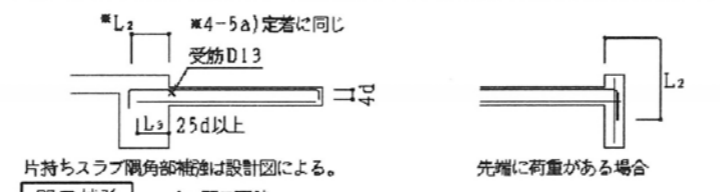
5-1 鉄筋の折り曲げ及び定着



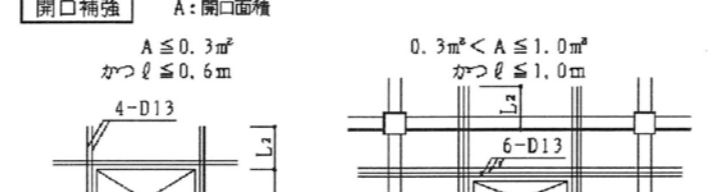
5-2 継手



5-3 片持ちスラブ



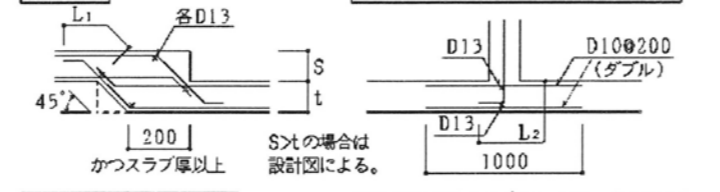
5-4 補強筋



6-1 定着及び継手



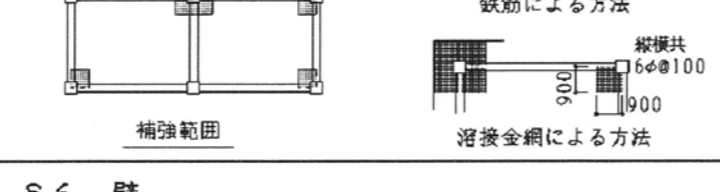
6-2 壁配筋



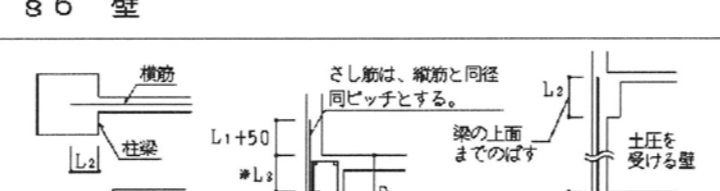
6-3 補強筋



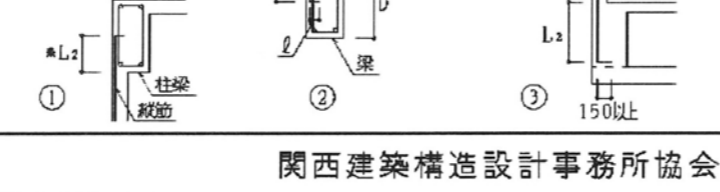
6-4 定着及び継手



6-5 定着及び継手



6-6 定着及び継手



7-1 独立基礎

○ 定着長さは l_2 及び継手長さは l_1 とする。
○ ただし耐震壁で筋、あばら筋の内側に定着できない場合は、 $l_2 = 150$ 程度 $45 \sim 90^\circ$ 折り曲げ、定着長さは l_2 かつ $D/2$ 以上とする。(過し配筋の場合は不要)
○ 土圧を受ける壁の外側筋の定着は図による。
○ 継手位置はどの部分でもよいが、土圧を受ける壁は5-2項の土圧面側を上端筋側に読み替える。
○ 壁の配筋は設計図書による。
○ ダブル配筋では中止筋を縦筋共 $D10 \phi 1000$ 以内を標準とする。

7-2 杭基礎

○ 1本杭で偏心していない場合は、立上り筋不要
○ 杭頭補強筋は設計図による。
○ 杭頭を切断した場合は補強は、設計者の指示による。

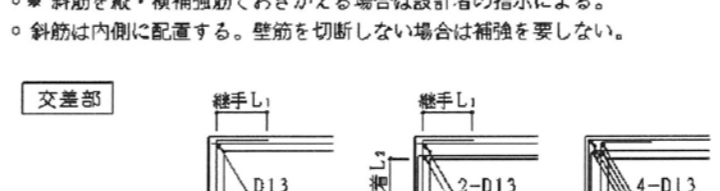
7-3 べた基礎継手及び定着

継手位置は5-2項の上端筋を下端筋に読み替える。
○ 4-5a) 上端筋定着に同じ
○ $a_1/a_2 \le 1/6$

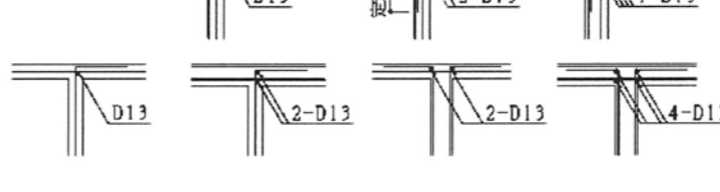
7-4 基礎と基礎梁



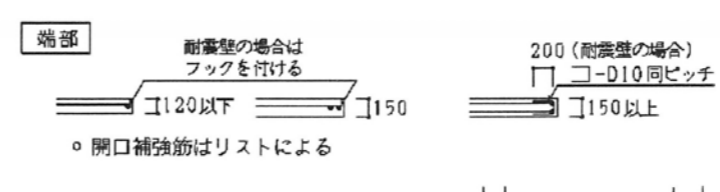
7-5 基礎と基礎梁



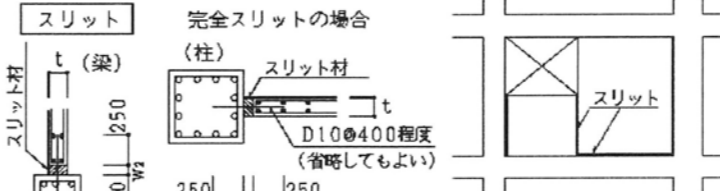
7-6 基礎と基礎梁



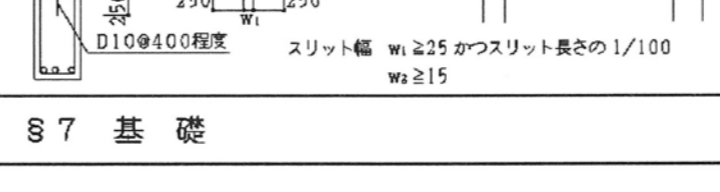
7-7 基礎と基礎梁



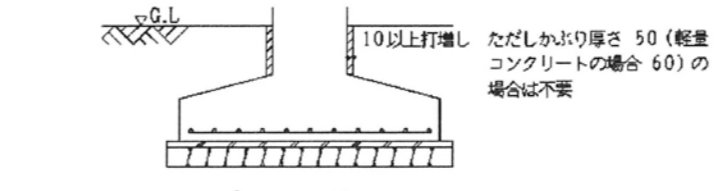
7-8 基礎と基礎梁



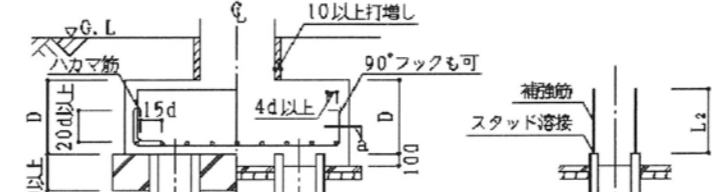
7-9 基礎と基礎梁



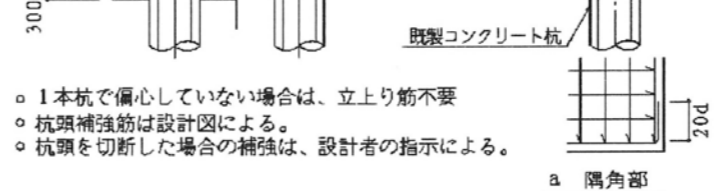
7-10 基礎と基礎梁



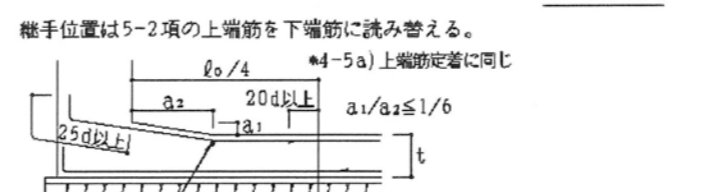
7-11 基礎と基礎梁



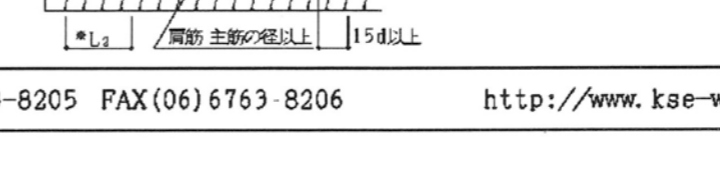
7-12 基礎と基礎梁



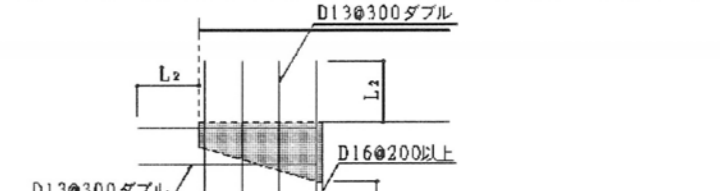
7-13 基礎と基礎梁



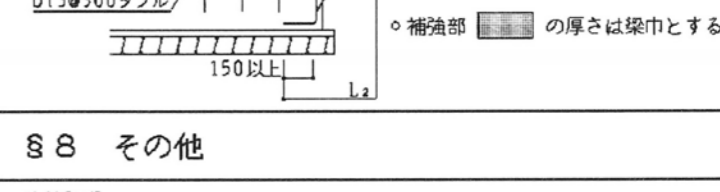
7-14 基礎と基礎梁



8-1 階段



8-2 土間コンクリート



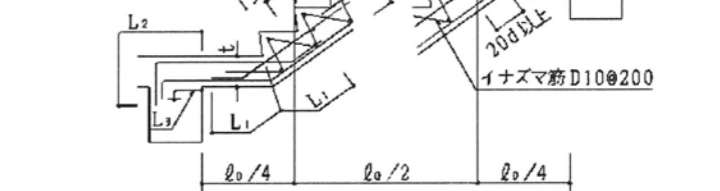
8-3 打増し補強



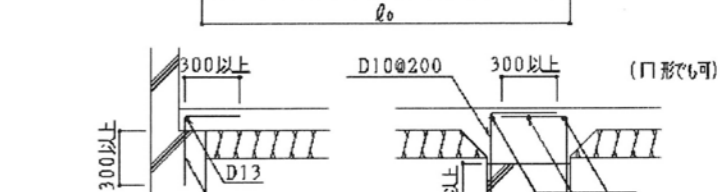
8-4 増築予定



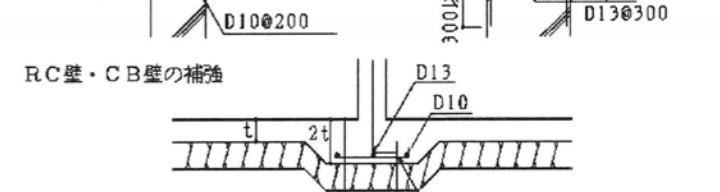
8-5 増築予定



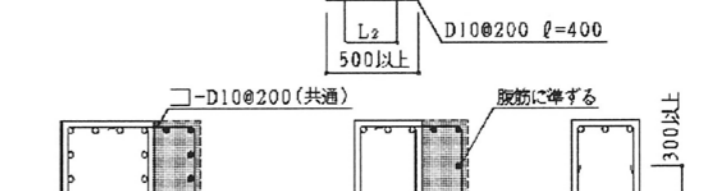
8-6 増築予定



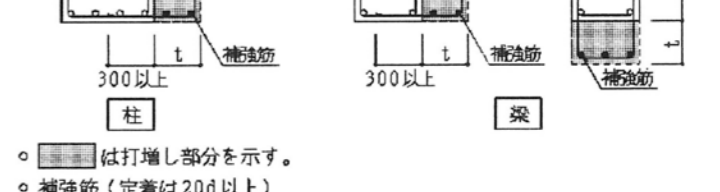
8-7 増築予定



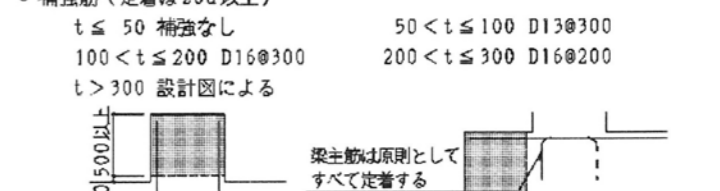
8-8 増築予定



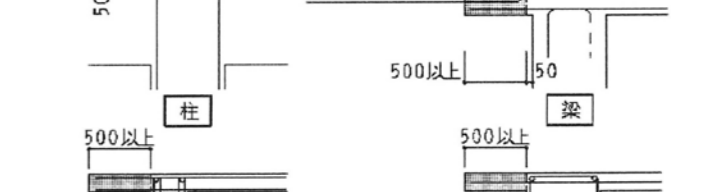
8-9 増築予定



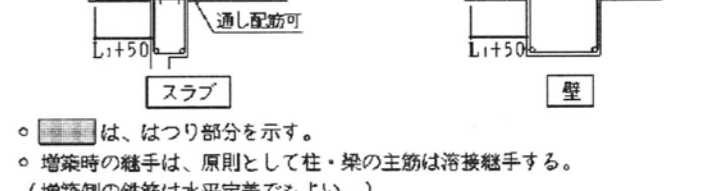
8-10 増築予定



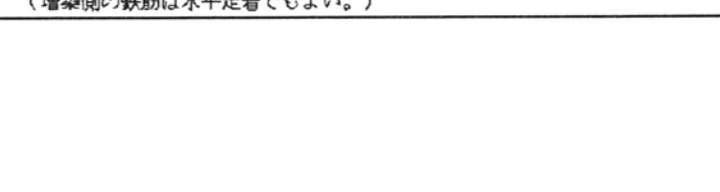
8-11 増築予定



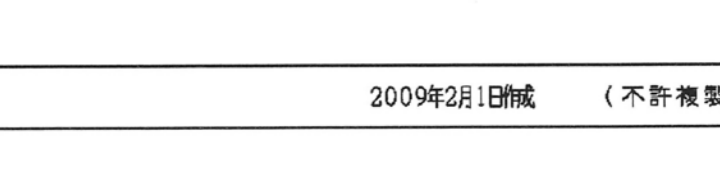
8-12 増築予定



8-13 増築予定



8-14 増築予定



鉄筋コンクリート壁式構造配筋標準図 2008年度版

1-1 基本事項
1-2 その他

§1 一般事項
1) 本標準図に記載なき事項は、鉄筋コンクリート構造配筋標準図による。
2) 耐久性上有効な仕上げのない壁（屋内、屋外共）及び土に接する壁は10以上増打ちする。
3) 特記なき限り粗骨材は最大径20^{mm}とする。

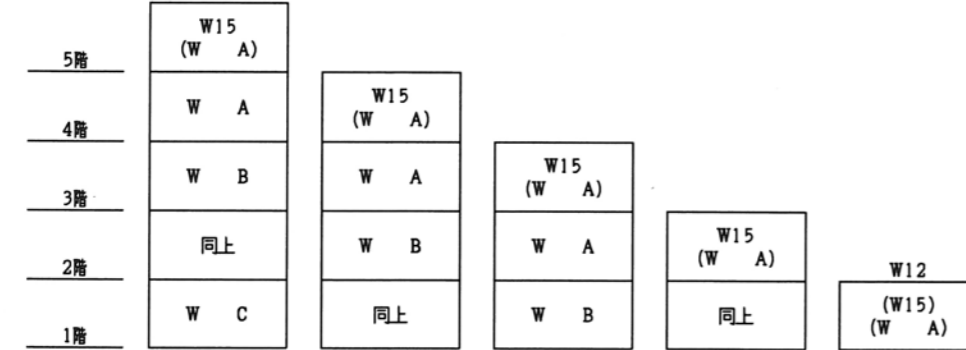
2-1 標準配筋リスト

§2 壁の標準配筋

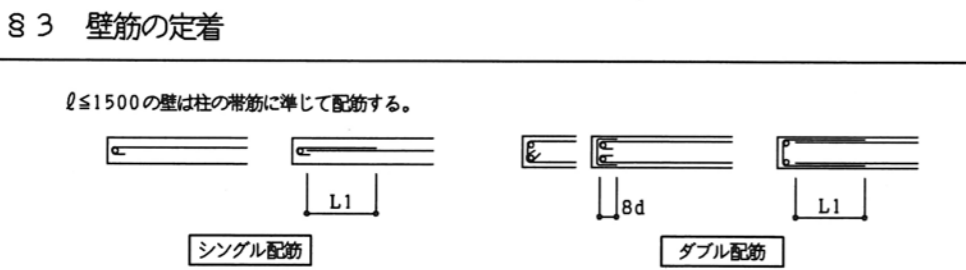
符号	厚さ	縦筋、横筋	開口補強筋	
			縦筋	斜め筋
W12	120	D10-φ200 (S)	1-D13	1-D10 (1-D10)
W15	150	D10-φ200 (S)	① 2-D13 (1-D13)	1-D13 (1-D10)
W A		D10-φ200 (D)	2-D13 (2-D13)	2-D13 (1-D13)
W B		D10-φ200 (D)	2-D16 (2-D13)	2-D13 (1-D13)
W C		D10-φ200 (D)	② 2-D19 (2-D16)	2-D16 (1-D16)

- 特記なき配筋は上表によるが、壁の厚さは86によるか、梁形を設ける事が望ましい。
- ()内は開口部の高さhがh≦1000の場合を示す。
- (S)はシングル配筋、(D)はダブル配筋を示す。
- ダブル配筋の巾止筋は、D10-φ1000以内を標準とする。
- 開口部補強の横筋（壁梁主筋）は設計図によるが、特記のない場合は縦筋に準じ、あばら筋は壁筋と同じとする。
- 壁符号は設計図に記載なき場合は下表による。
- 地下室のある場合は設計図による。
- ① 2-D13の代わりに1-D19とすることができる。
- ② 2-D19の代わりに2-D16+2-D13とすることができる。
- 斜め筋の配筋が困難な場合は、縦筋横筋に置き換えてもよい。

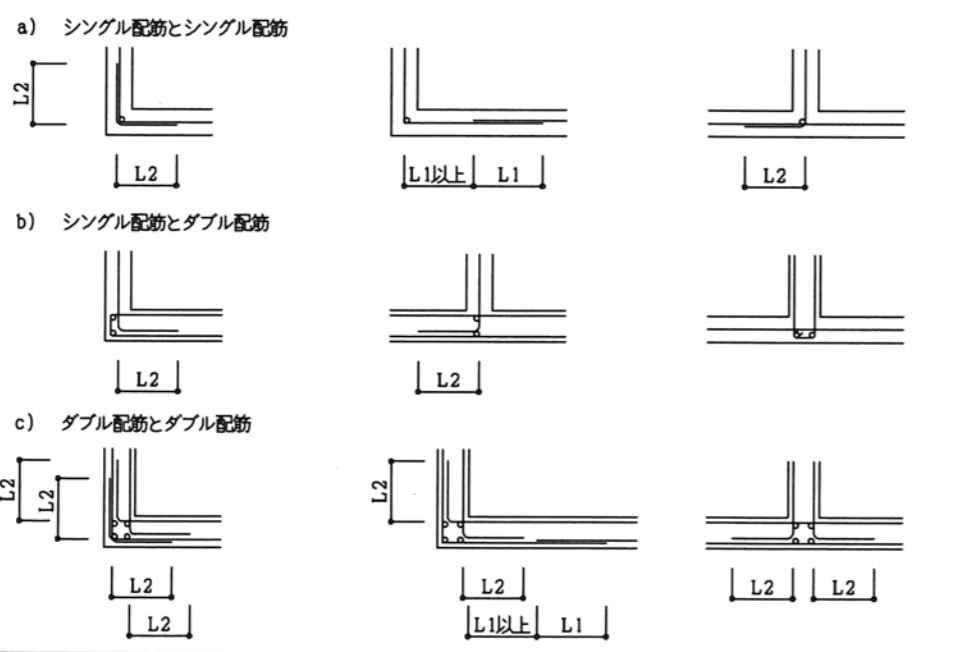
2-2 標準壁配置



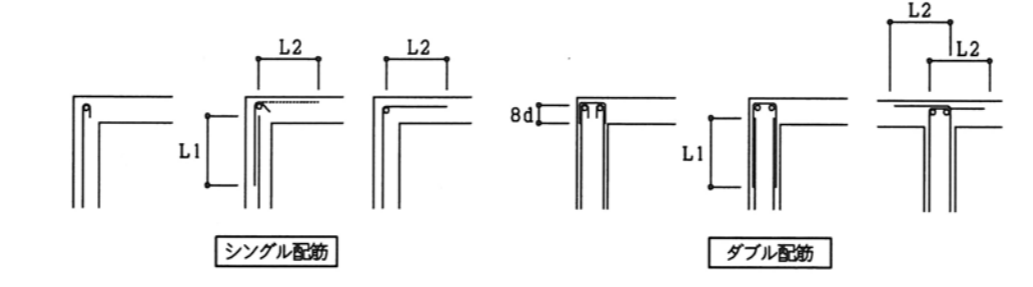
3-1 端部の配筋



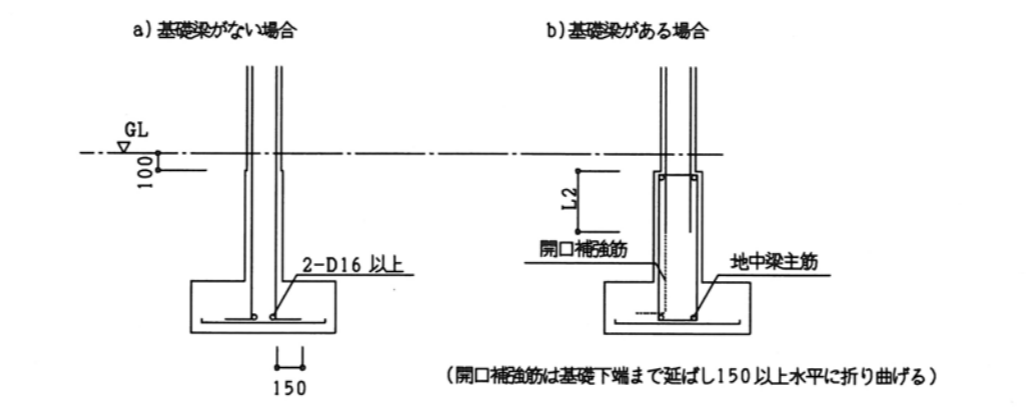
3-2 壁に対する定着



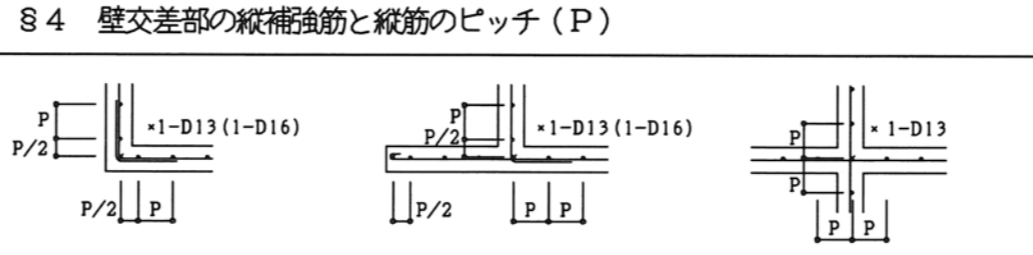
3-3 頂部の定着



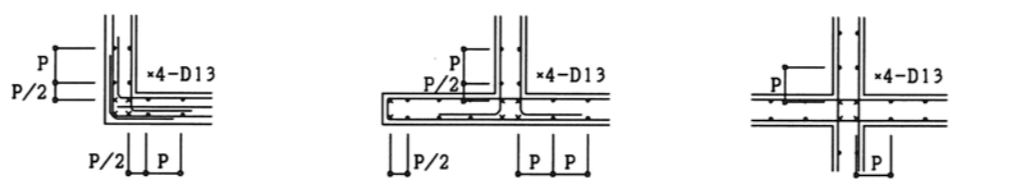
3-4 基礎に対する定着



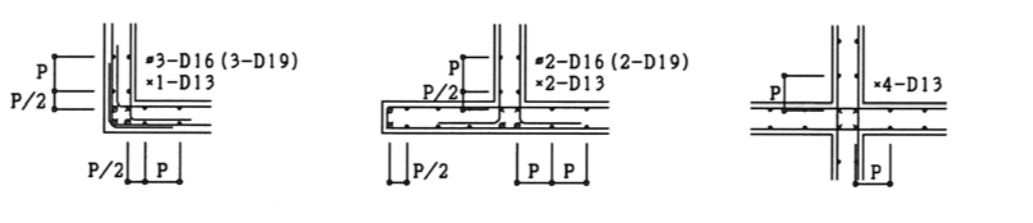
4-1 W12 (W15)



4-2 W A



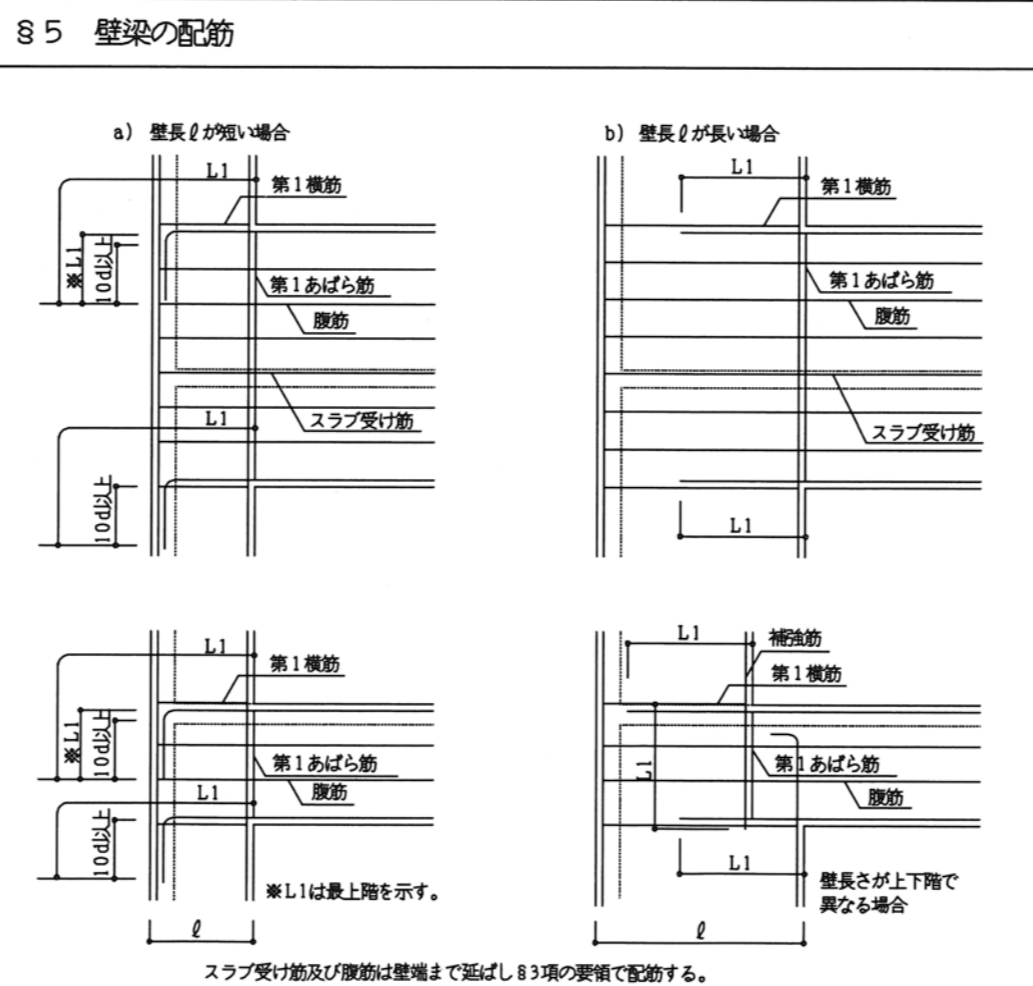
4-3 W B (W C)



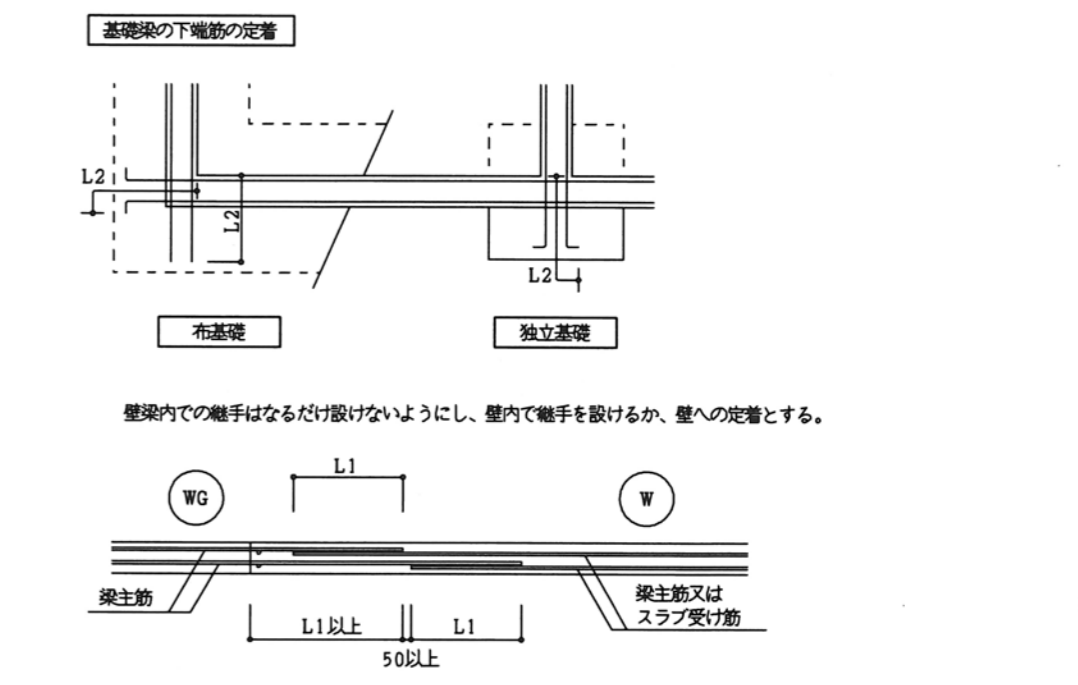
4-4 継手、定着

縦補強筋の定着及び継手は、ラーメン構造の柱の主筋に準ずる。

5-1 定着



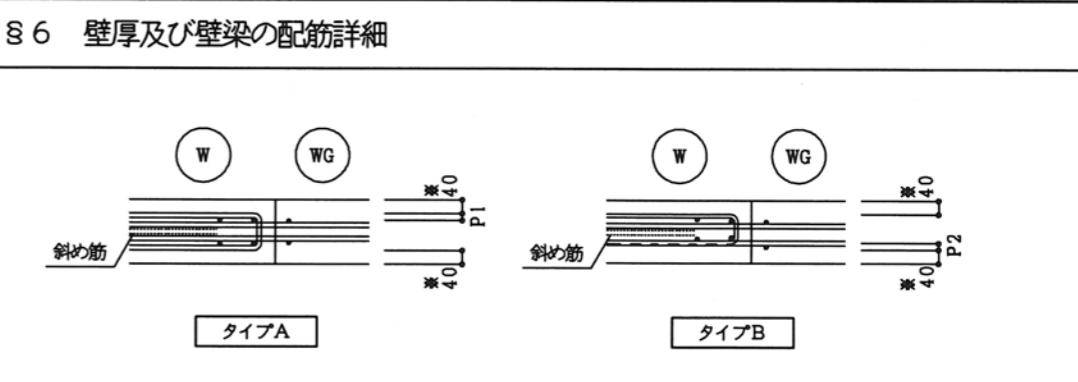
5-2 継手



5-3 その他

- 隣接の梁と同レベルの場合は通し配筋とするが、壁長が非常に大きい場合の定着はL1のみとしてもよいが主筋がスラブレベルと同じ場合は5-2スラブ受け筋との継手とする。
- スラブ受け筋は、ダブル配筋の場合は2-D13、シングル配筋の場合は1-D13とし壁筋の要領で定着する。又壁梁のない場合も配筋する。
- 腹筋は壁の横筋と同径、同ピッチとする。

6-1 配筋タイプ

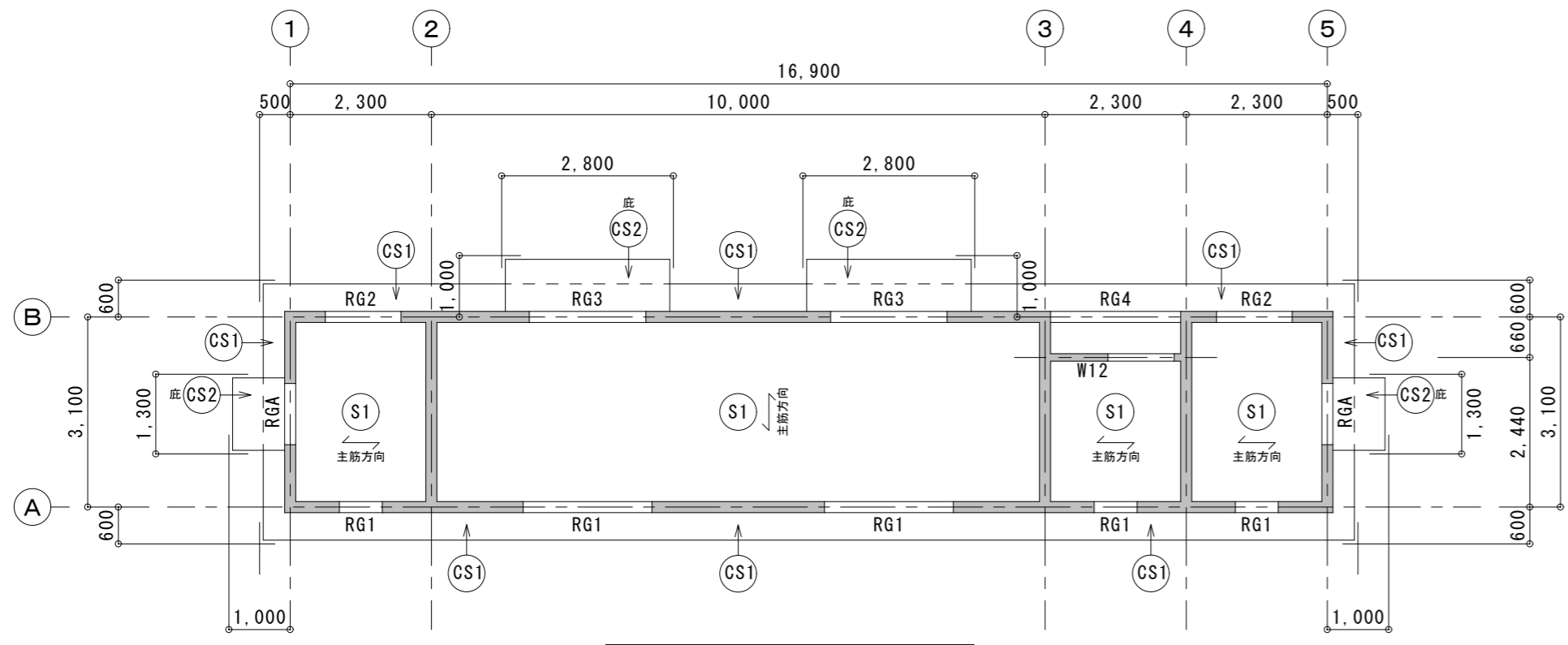


6-1 タイプ別壁厚表

配筋タイプ別による壁厚表 (mm)		タイプA			タイプB		
		梁主筋			梁主筋		
壁筋	斜め筋	D13	D16	D19	D13	D16	D19
D13	D10	190	195	205	185	190	195
D16	D13	195	205	215	190	200	205
D19	D16	200	210	220	200	210	210

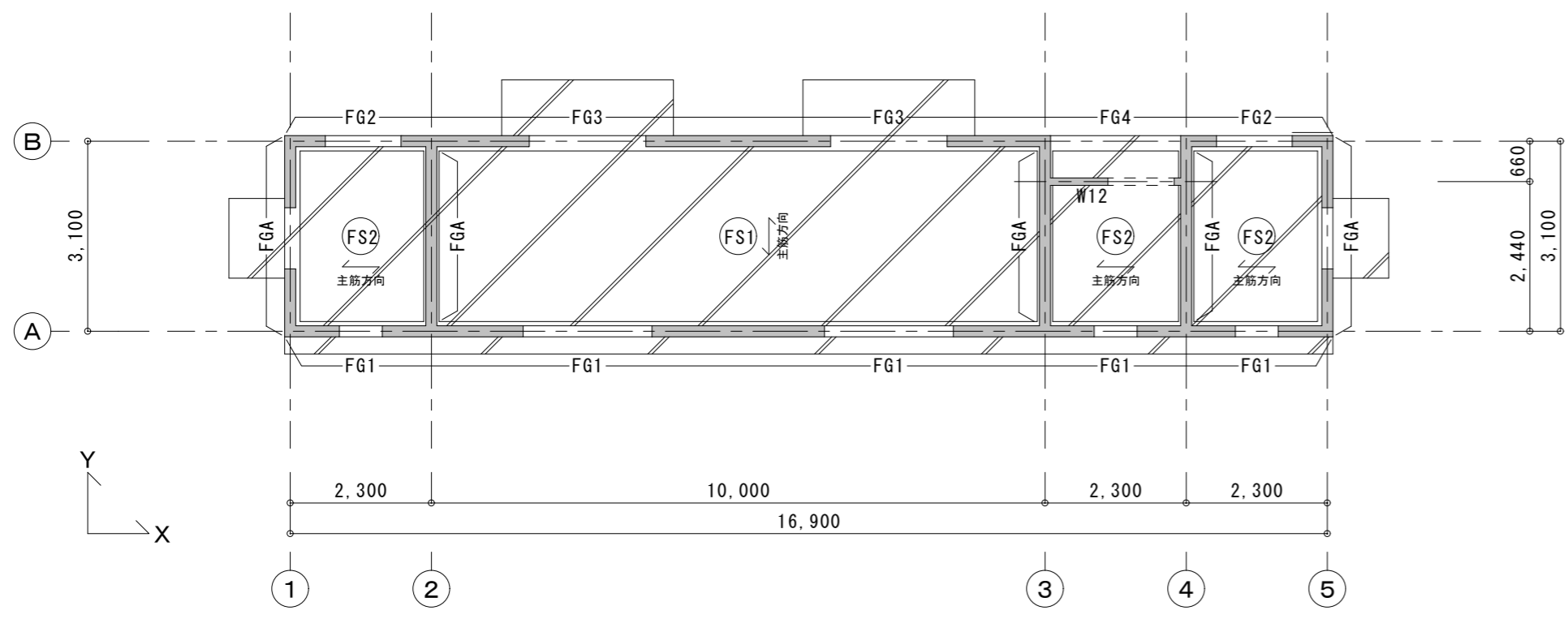
- かぶり厚さを40^{mm}とした場合をしめす
※ 最小かぶり厚さを30^{mm}とした場合、壁厚は上表より-20^{mm}とする。
- 主筋のあきは1.5dかつ25^{mm}以上とし、斜め筋が配筋できる寸法とする。
- 主筋と帯筋及びあばら筋の寸法関係は下表による。

壁筋補強筋	壁筋補強筋		壁梁主筋	
	D1	P1	D2	P2
壁筋 D10	D13	20	D13	26
	D16	22	D16	26
	D19	23	D19	26



R階 伏図 1/100 (見上げ図)

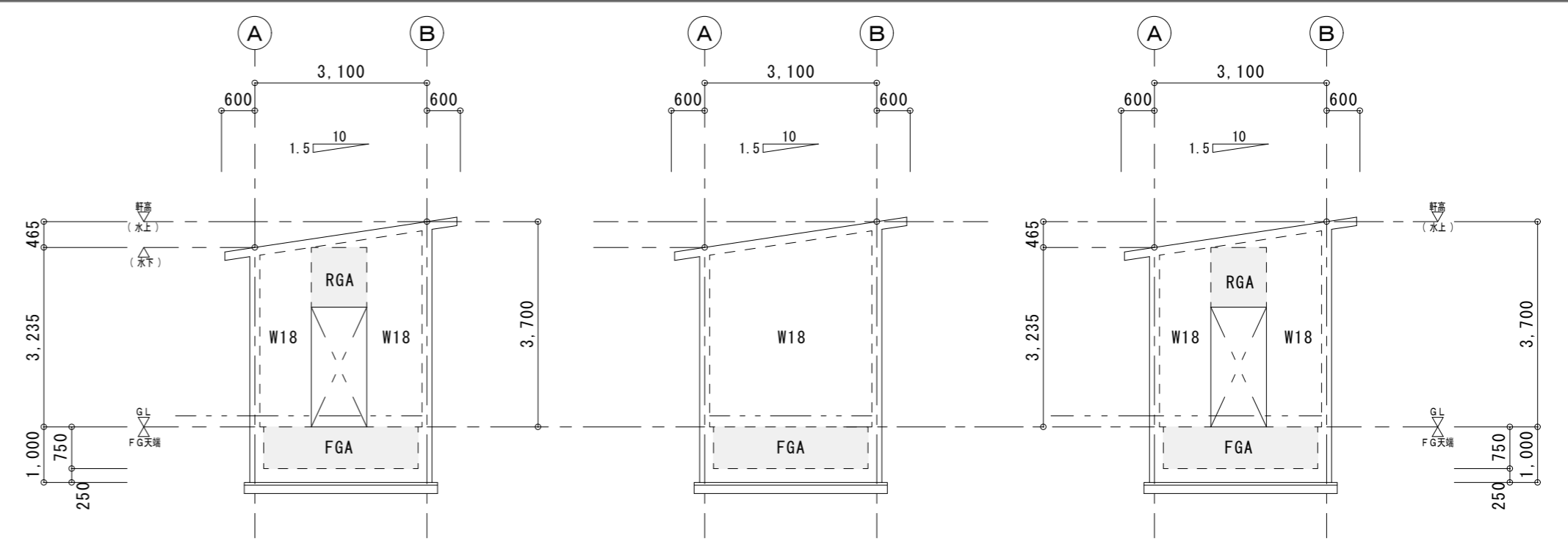
(1階 壁 R階梁・床版)
 鉄筋コンクリート造を示す
 記入なき壁(躯体)は W18 とする
 外周部壁 増打は 厚30 とする
 内部壁 増打は 厚10 とする



基礎伏図 1/100 (見下げ図)

(1階 壁・地中梁・基礎)
 鉄筋コンクリート造を示す
 記入なき壁(躯体)は W18 とする

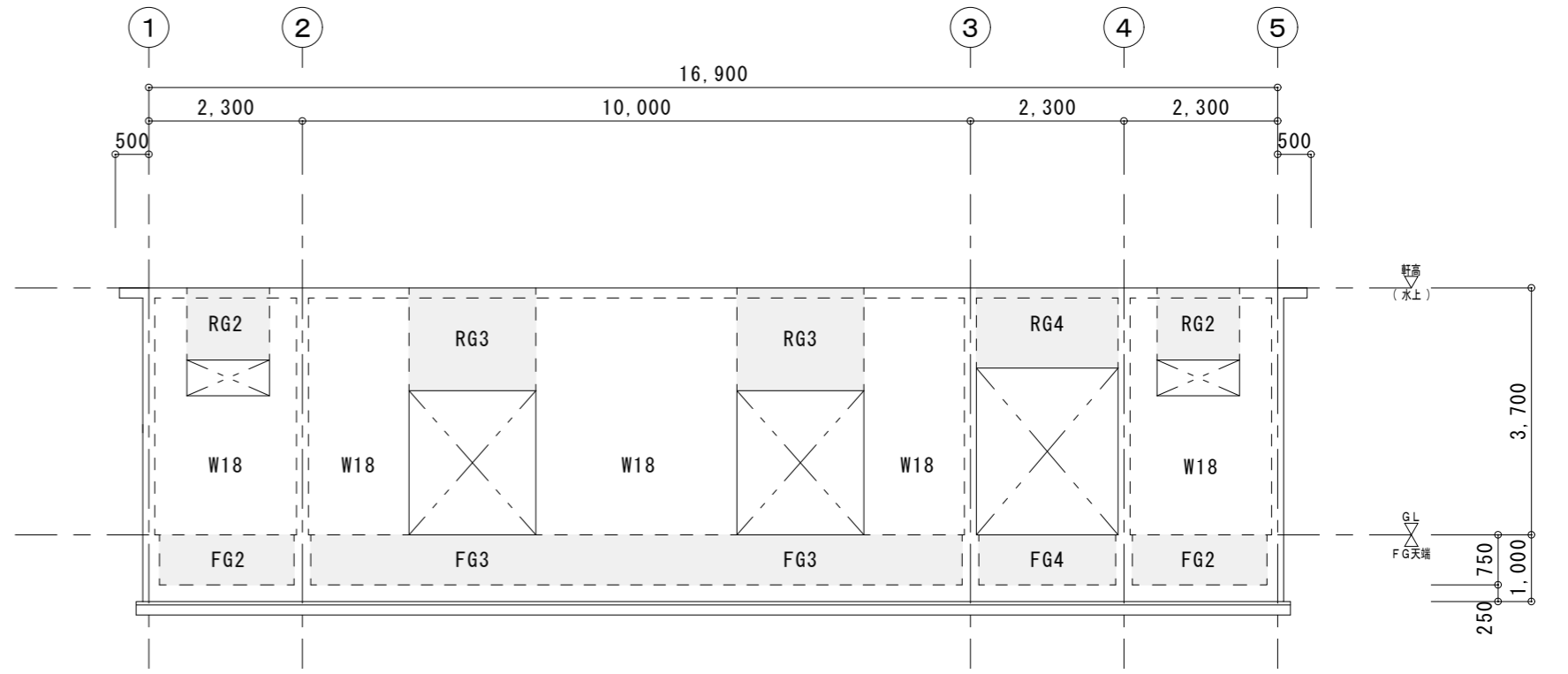
範囲及び高低は意匠図と照合の事
 土間コンクリート 厚 120mm
 砕石 厚 100mm
 土間配筋 D13-@250 (シングル・加筋)



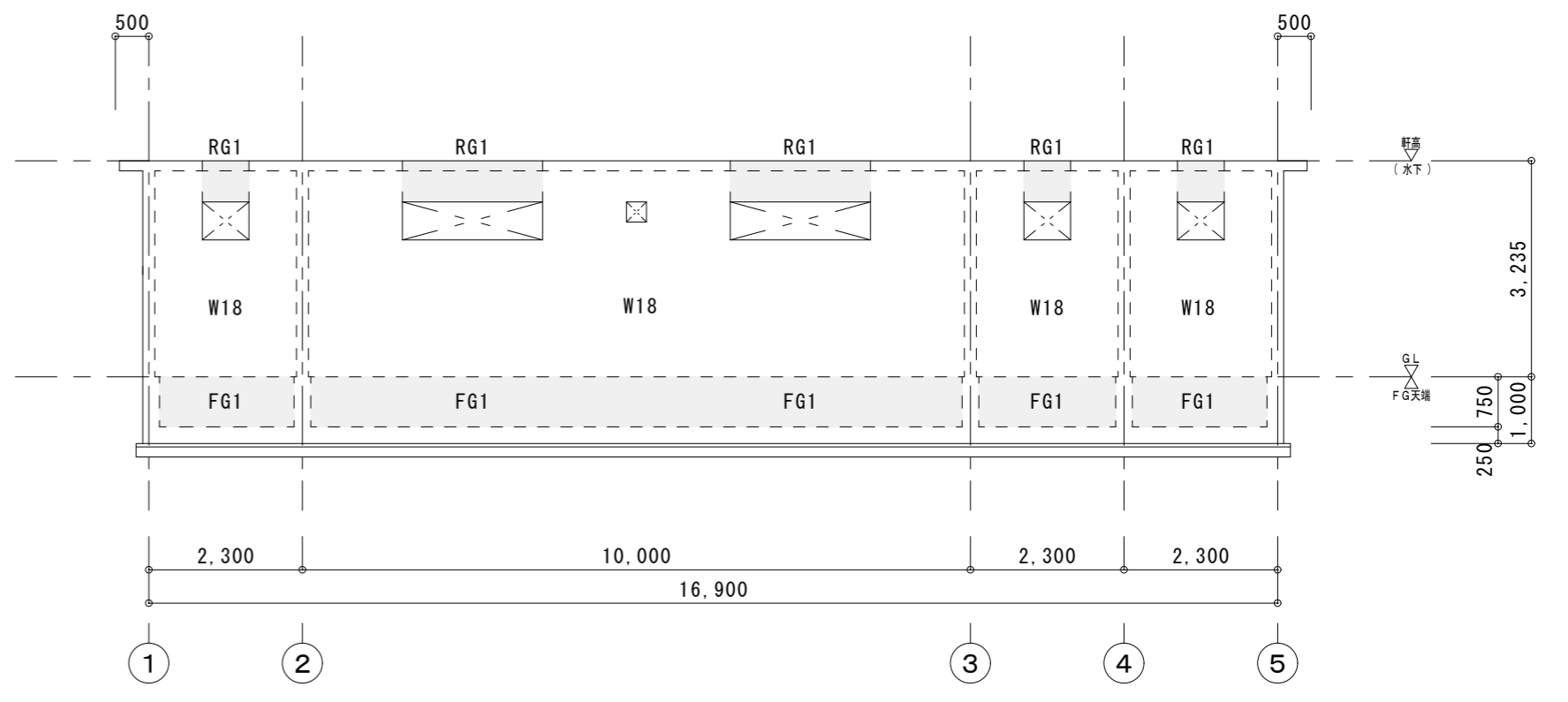
1通 軸組図 1/100

2~4通 軸組図 1/100

5通 軸組図 1/100

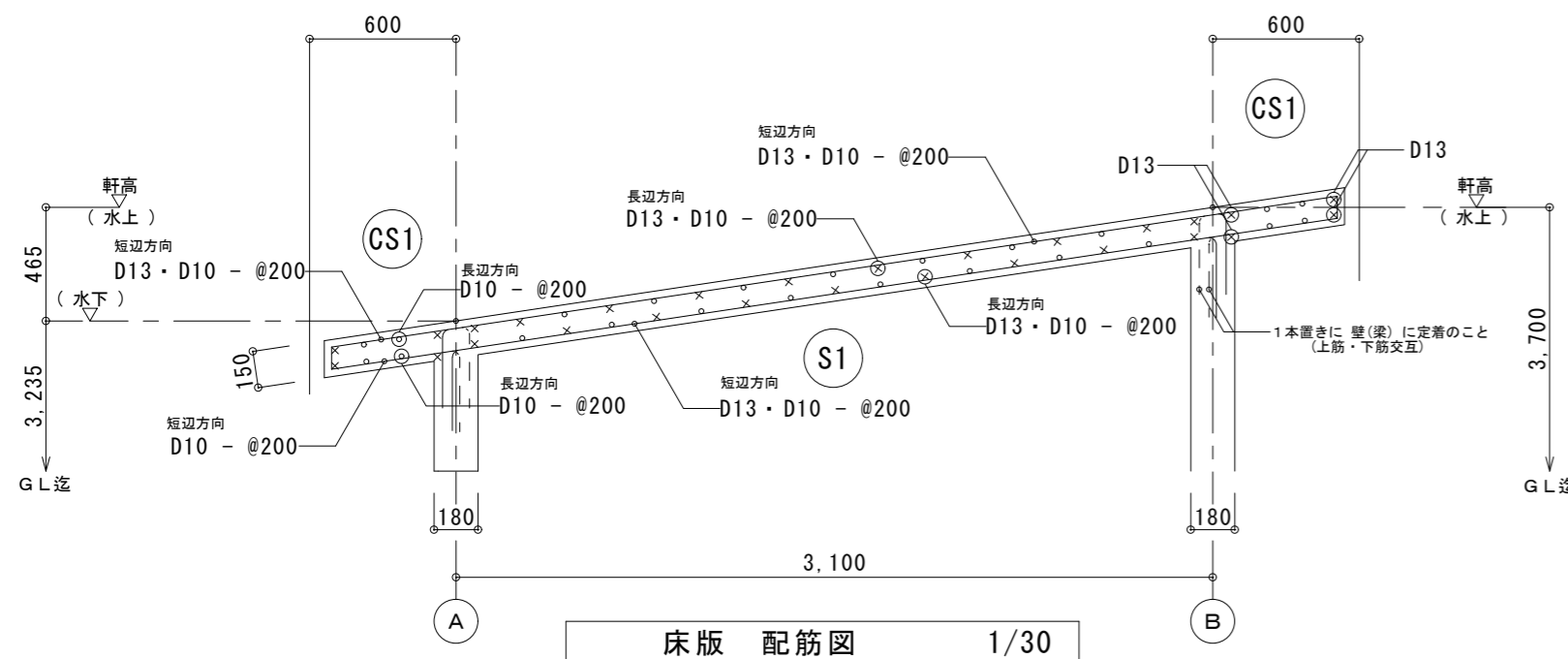


B通 軸組図 1/100



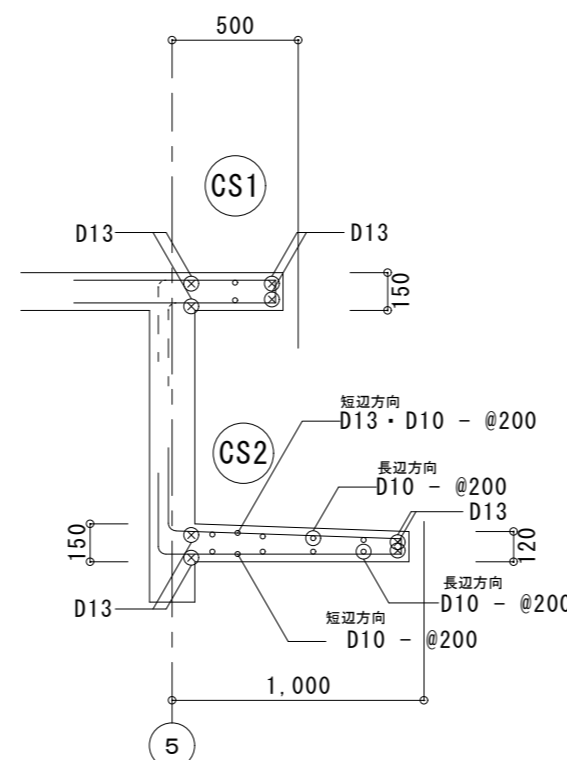
A通 軸組図 1/100

京丹波町		町長	副町長	参事	主管課長	核算	設計	工事名	図番
設計番号	平成 22 年 10 月							平成21年度(繰越) 松山小学校屋外便所棟新築工事	C-05
各伏図・各軸組図								縮尺	A2 S=1/100 A3 S=1/141



床版 配筋図 1/30

※ 各寸法は 躯体寸法 を示す。



間仕切壁 配筋図 1/30

大梁 配筋図 1/30

特記無き限り註記による
巾止筋 D10-@1000以内

階	符号	G 1	G 2	G 3	G 4	G A	
		位置	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面
R G	断面						
		腹筋 2-D13	腹筋 6-D13	腹筋 10-D13	腹筋 8-D13	腹筋 6-D13	
		B x D	180 x 600	180 x 1080	180 x 1540	180 x 1200	180 x 1080
		上端筋	2 - D16	2 - D16	2 - D16	2 - D16	2 - D16
		下端筋	2 - D16	2 - D16	2 - D16	2 - D16	2 - D16
S T R	□-D10 - @200	□-D10 - @200	□-D10 - @200	□-D10 - @200	□-D10 - @200		

※ 各寸法は 躯体寸法 を示す。

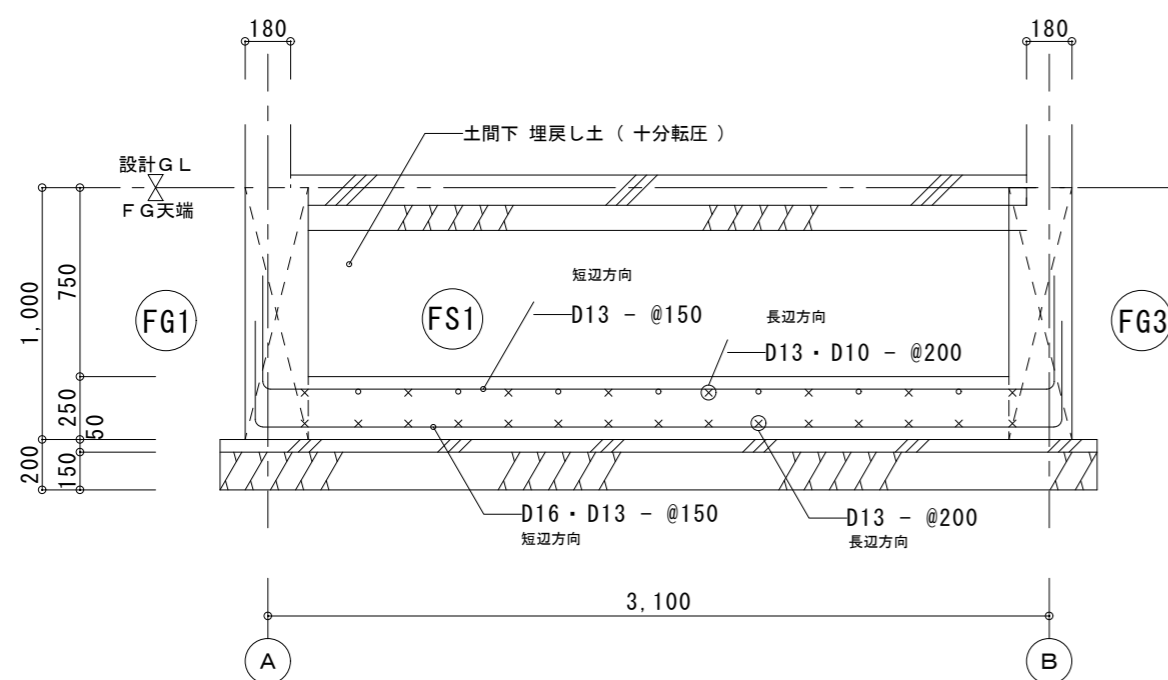
床版 リスト

符号	版厚	位置	短辺方向		長辺方向	
			端部	中央	端部	中央
S 1	150	上筋	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200
		下筋	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200
C S 1	150	上筋	D13, D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200
		下筋	D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200
C S 2	150~120	上筋	D13, D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200
		下筋	D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200	D10 - @200

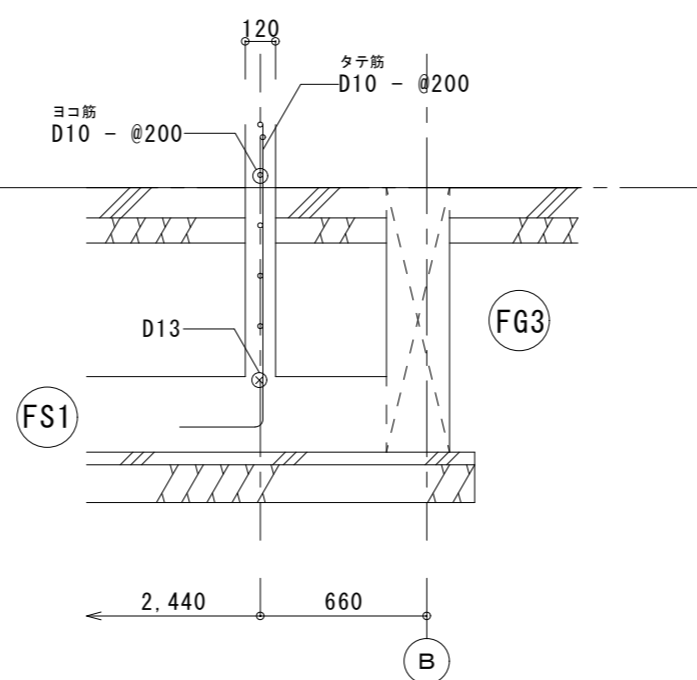
地中梁 配筋図 1/30

特記無き限り註記による
巾止筋 D10-@1000以内

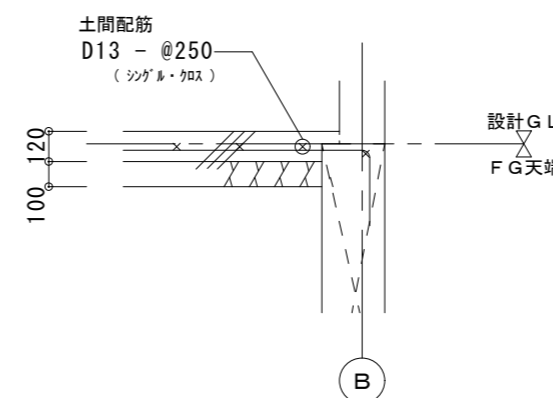
階	位置	F G 1 ~ F G 4 ・ F G A	
		全断面	
F G	断面		
		腹筋 6-D13	
		B x D	250 x 1000
		上端筋	2 - D16
		下端筋	2 - D16
S T R	□-D10 - @200		



ベタ基礎 配筋図 1/30



土間 配筋図 1/30



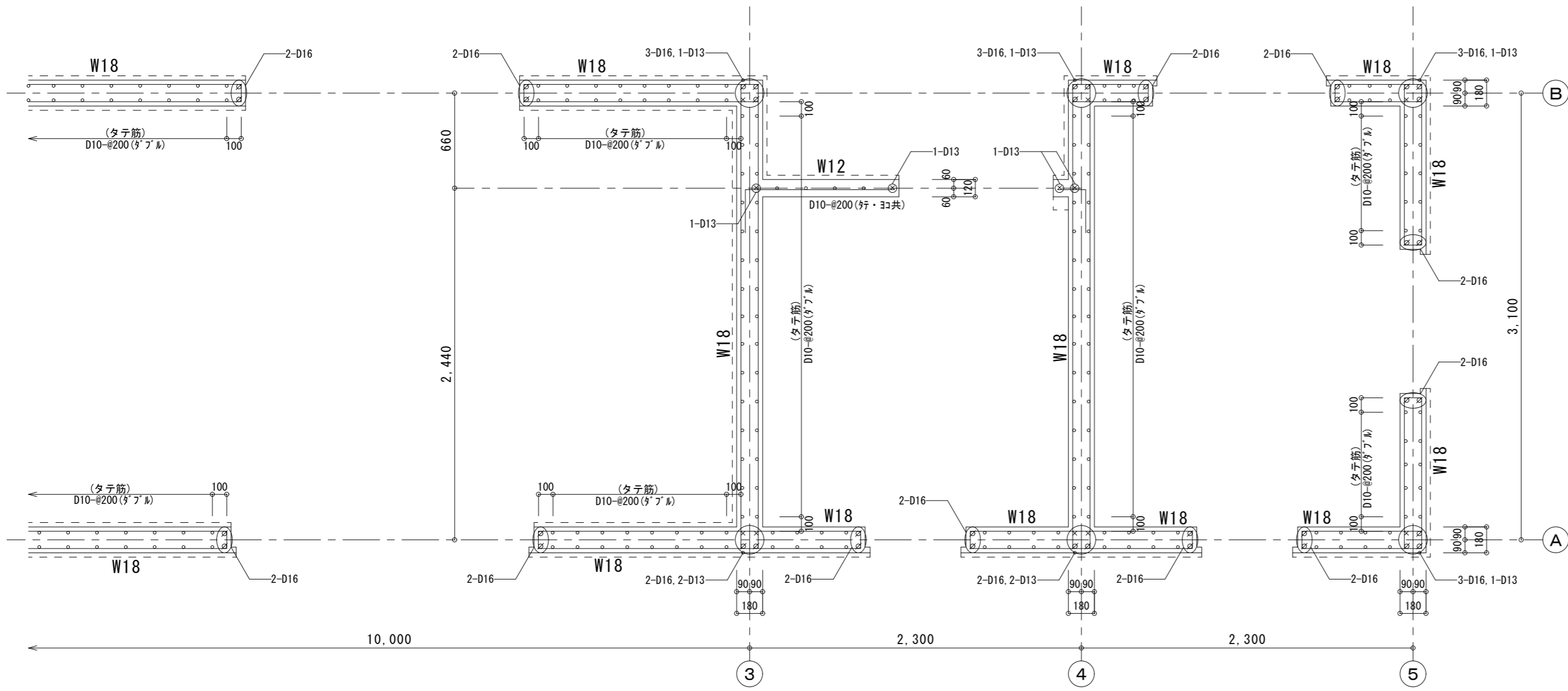
ベタ基礎リスト

※ 各寸法は 躯体寸法 を示す。

符号	版厚	位置	短辺方向		長辺方向	
			端部	中央	端部	中央
F S 1	250	上筋	D13 - @150	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200	D13 - @200
		下筋	D16, D13 - @150	D13 - @200	D13 - @200	D13 - @200
F S 2	250	上筋	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200	D13, D10 - @200	D13 - @200
		下筋	D13 - @200	D13 - @200	D13 - @200	D13 - @200

一般事項

地耐力	設計許容地耐力は、G L - 1,000 に於いて 50KN/m ² (長期) とする
使用コンクリート	普通コンクリート 設計基準強度 F _c = 21N/mm ²
使用鉄筋	SD295A (D16以下の鉄筋)
鉄筋継手	D16以下は 重ね継ぎ手 を原則とする。
その他	特記なき事項は 建築基準法・同施行令 及び 「構造標準図」 に準ずる。 各種工程の施工計画報告書を提出の事



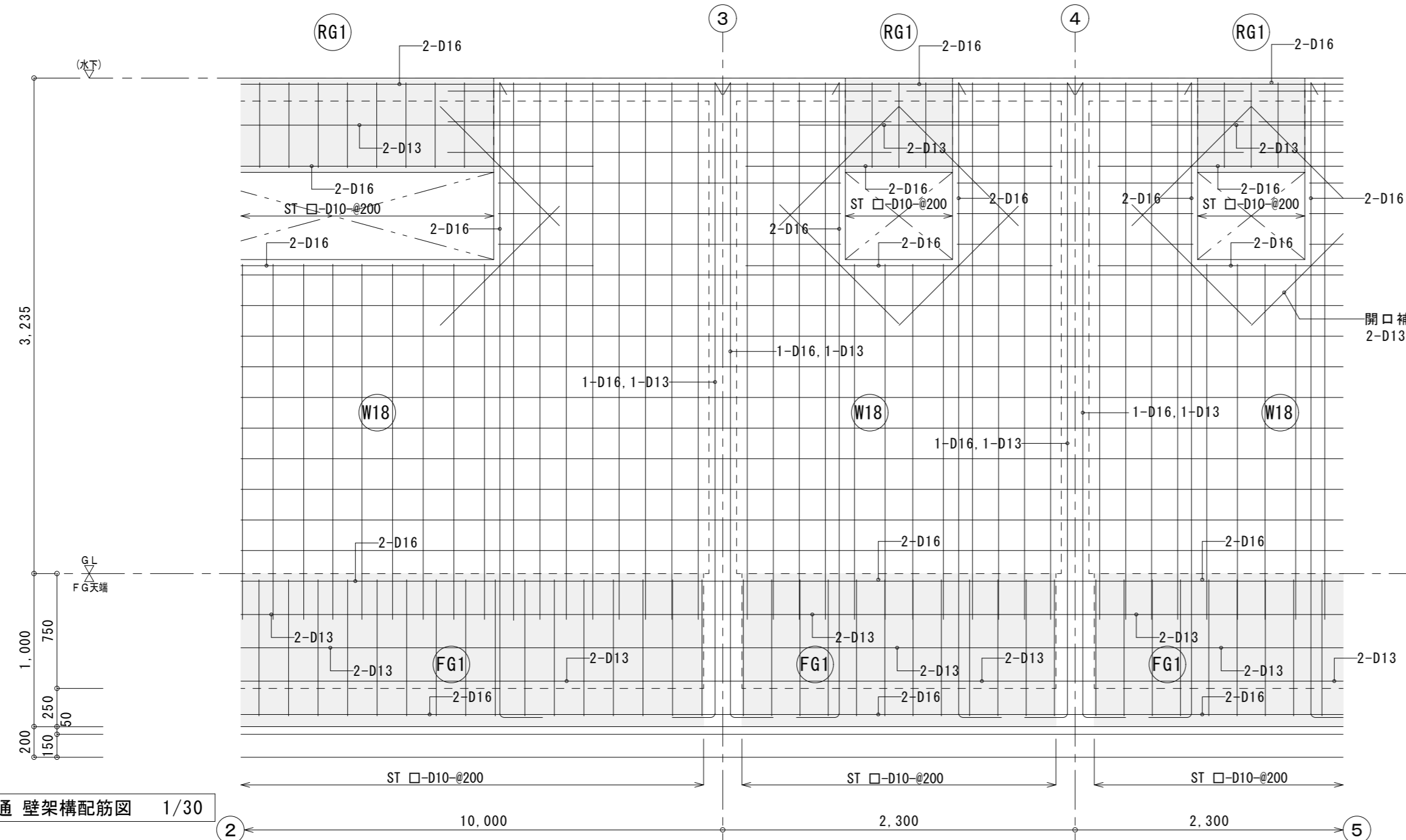
1階壁配筋要領図 1/30 ※ 各寸法は 躯体寸法 を示す。

壁配筋図 1/30

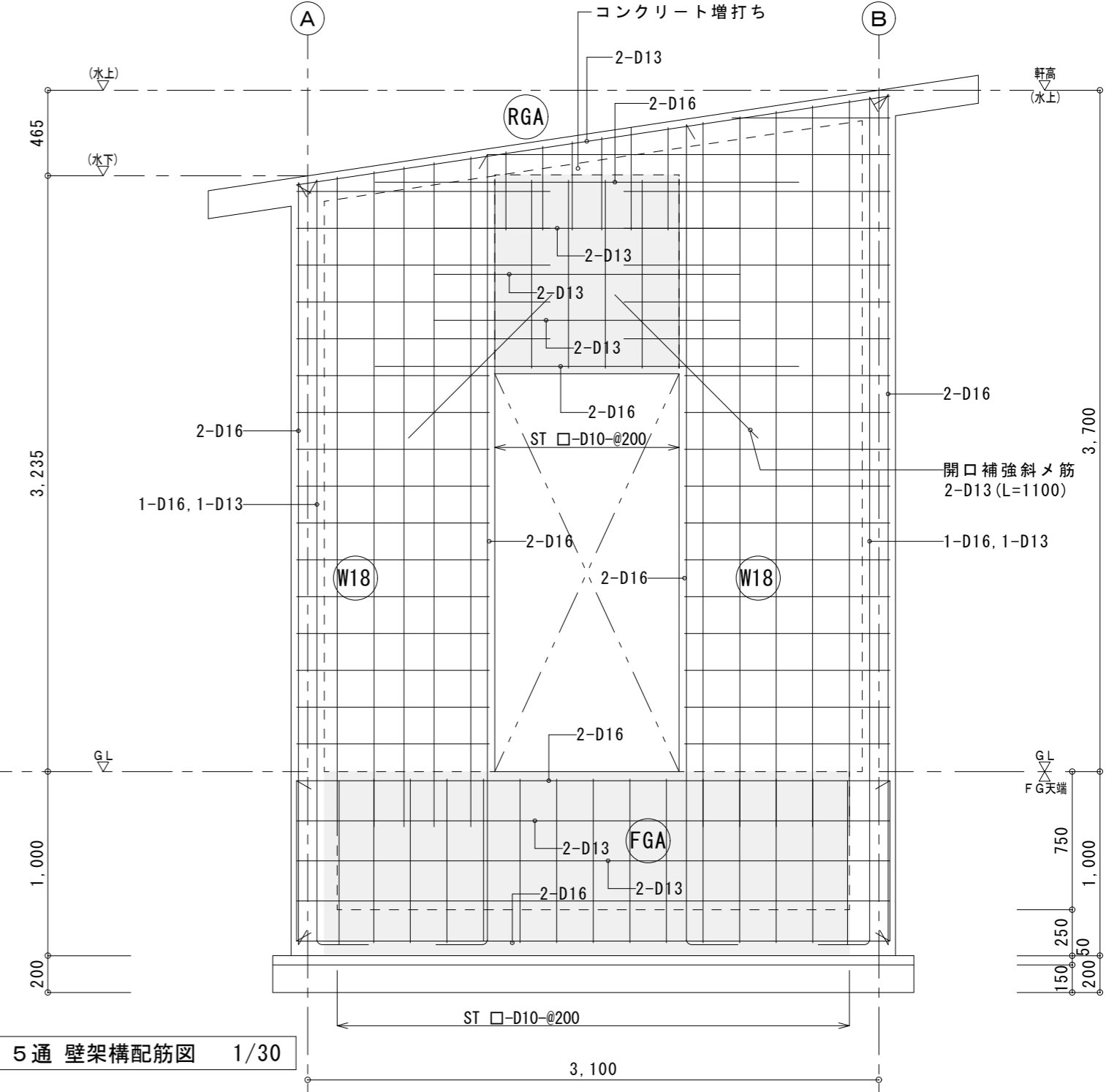
符号	W18	W12
断面		
壁厚	180	120
タテ筋	D10 - @200 (D)	D10 - @200 (S)
ヨコ筋	D10 - @200 (D)	D10 - @200 (S)
巾止筋	D10 - @1000	—
開口補強筋	タテ筋	1 - D13
	ヨコ筋	1 - D13
	斜メ筋	1-D13 (L=1100)

※ 各寸法は 躯体寸法 を示す。

壁配筋
W20 行筋 D10-@200(タテ筋)
ヨコ筋 D10-@200(タテ筋)



A通壁架構配筋図 1/30



5通壁架構配筋図 1/30